●金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会・会報誌「やまざと」VOL. 20——山の子たちのうた号　2006年１月

やまざと

特 集　山の子たちの うた♪

「同じ時間」

ある朝、
会社に向かう電車の窓から ぼんやり外を眺めていると
はるか遠く 稜線付近を飛ぶ鳥の姿が目に映った。
ちょうどその時、倉谷の流れでは、
なんとなく楽しい気分の岩魚が水面から飛び跳ねた。
ブナオ山の斜面では、
年老いたカモシカが
鼻づらで落ち葉をかき分けながら瑞々しい草を探していた。
その瞬間、蛇谷ぞいの林の縁では、
周囲に気を配りながら草を食べていた幼い野ウサギが
拓けた草地にまで ついうっかり足を伸ばした。
枯れ木に止まっていたクマタカが
のこのこ出てきた野ウサギを
じっとうかがっていたことは、だれも知らない。

21期　竹中　敏（イラストと詩）

「やまざと」VOL. 20 CONTENTS　　山の子たちのうた号

表紙　「同じ時間」——21期・竹中　敏（クマタカのイラスト＆詩）
　　「やまざと」　題字——23期・中川　晃成（イラストに合わせて毎号執筆）

01p　特 集　山の子たちのうた
02p　ワンゲル歌集の思い出——14期・清家　雅幸
03p　「岳人のうた」に寄せて——15期・奥名　正啓
04p　歌は世に連れ——15期・舟田　節子
05p　子守唄「白山の尾根」——17期・川村　高弘
06～07p　ワンゲルＯＢ愛唱歌——18期・大西　正明
08p　ユーミンが好きだった——21期・大野　直子
09p　唄ったこと——22期・森　恵利子
10p　金沢大学ワンダーフォーゲル部の歌　募集！！

11p　やまざと写真館－1——11期・加藤　忠好

12p　メール宅急便「特別寄稿」
13～21p　カラコルム・トレッキング——15期・舟田　節子

22p　やまざと写真館－2——21期・大野　直子

23p　OB会支部だより
24～25p　KUWV首都圏支部設立奮戦記——９期・山中　重夫
26～28p　首都圏ＯＢ会 高尾山ＰＷ——18期・横井　恒雄
29～43p　近畿OB会 2004・12・12～活動大公開！！——8期・篠島　益夫

44～45p　秋の山小屋酒場——15期・舟田節子

46～48p　野沢温泉スキー合宿'05　報告記——19期・栂　典雅
49p　野沢温泉スキー合宿'06　予告記——11期・青柳　健二

50～51p　現役生2005年度活動報告——現役３回生・48期・伊藤　謙一

52p　やまざと写真館－3——20期・深田　進

53p　2005年 OB会会計報告——23期・鳥越　伸博

54～55p　OBひとこと通信

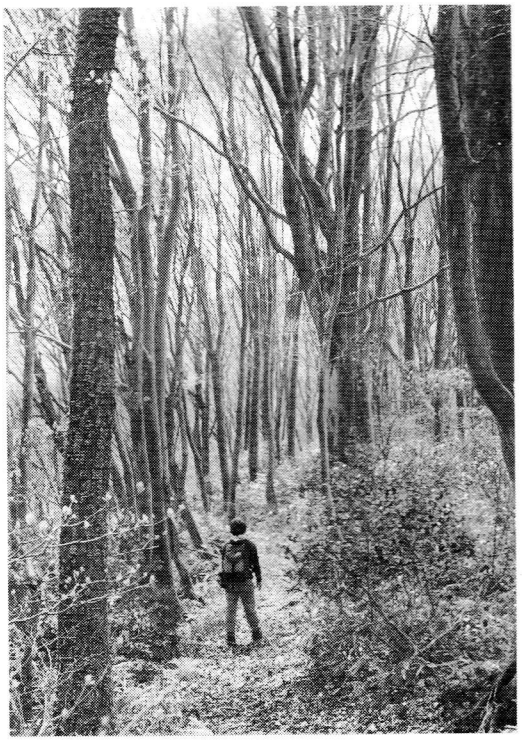
56～59p　住所録 '05変更分（2005年12月現在）——23期・名倉　均

特 集

山の子たちの うた

綾線でひとり　谷から吹き上げられる風にさらされていると
きまって口を突いて出るのが、「一人の山」だった。
♪山に憧れ　山に行ぃき～
言葉すくなぁぁぁ～に　ただあゆぅむ～♪

沈殿のテント。
雨で進めぬいらだちは、



福井県・越知山（おちさん）のブナ林を歩く
栂睦美（21 期）さん

♪雨が降り！　てるてる坊主が泣いても！
私たちは泣かないで！
山を見つめる～～～
ランララララン♪
山の子は　山の子は　みんな強いぞ　強いぞっ！♪

四高生みたいなバンカラ口調でがなる「山の子」で
ウサを晴らした。

そう。
ぼくらの唇には、いつも、山のうたがあったよね。
たのしい時も、さびしい時も…。

ワンゲル歌集の思い出

～黄ばみと滲みが、語りかけてくる～

14期　清家雅幸

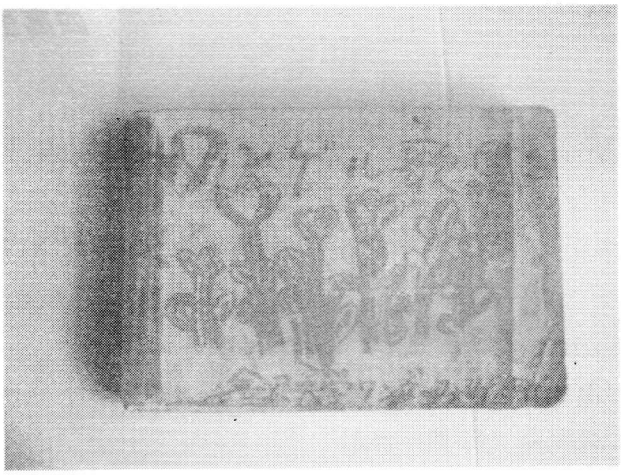
私が入学したのが昭和４４年、大学紛争の影響で国中が騒々しい時代であったからか、自然志向の強い同期が４０人位入部し、夏合宿は７パーティという盛況であった。

各パーティは５～６人の新人生を含む１２～３人で構成され、テントも２張りで夕食後のミーティング、沈殿の時の暇つぶしには食テン（メインテント）に集まり、ワンゲル歌集を取り出し歌ったものである。

また時代を反映してか、カレッジソングやフォークソングといったジャンルの歌が若者たちに支持されていて、それらのミニ歌集を手作り（青焼きコピーで）し、合宿などに持参した記憶もある。その歌集はなかったけれど、その当時の古いワンゲル歌集が私の手もとに残っていた。背表紙がとれているので何年発行のものなのか判らないが、黄ばんで滲みのついたページを見ると当時のことが懐かしく思い出される。

社会に出てからも知人と山に行くことが少なからずあったが、一緒に山の歌を歌ったことはほとんどない。やはり私にとってワンゲル仲間とともに歌う山の歌は特別なものである。

これからはＯＢ会の仲間と、それもできればテントの中でワンゲル歌集を開いて一緒に歌えたらいいな、と思っている。



「岳人のうた」に寄せて
～ふと気づくと口ずさんでいる～

15期　奥名正啓

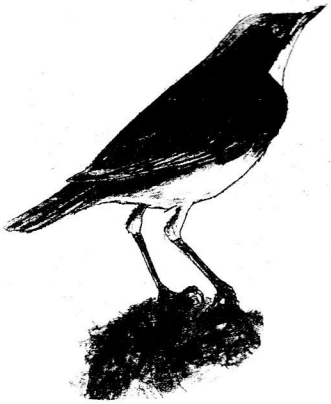
柄にもなく白山で自然解説もどきをしている。

どの山でもそうだが、山を訪れる人は大きくふたつのタイプに分かれる。ひとつは、上昇志向が強くとにかく上へ上へと頂上めざしていくタイプ。もうひとつは花の白山と言われるように高山植物を目当てにしているタイプであり、白山ではこのタイプのなかでも群を抜いて人気のあるものがクロユリである。今や白山とクロユリとは一体となって石川県のシンボルとなっている。そのクロユリは白山固有種でもなく、白山より東側あるいは北方の地域では広く分布しているというのに、わざわざ遠方からクロユリを目当てにやってくる。大きくもなく派手でもなく芳香を放つわけでもないが、中高年の登山者には却ってそこに大人の魅力を感じるのかもしれない。

そのクロユリを2番の歌詞に織り込んだ「岳人のうた」は新入部員なって真っ先に心に刻まれた山の歌である。その歌詞はまだ白山にも日本アルプスにも登ったことのない私にも、まだ見ぬ山々への憧れを感じさせるものだった。トレーニングを終えての帰り道、ふと気がつくとこの歌を口ずさんでいることがよくあった。そして今でも時に口を突いて出てくることがある。それは日常のせわしない生活から逃れたいとき、山でひとり静かに寝転んでいるとき、今では遠くなってしまった足元に広がるお花畑よりもはるかに仰ぎ見る山並みばかりを見ていたあの頃のことを思い浮かべるとき、そしてその頃の人たちに再会したときなど様々である。

山での暇つぶしは歌うことぐらいしかなかったように思うが、その場面はあまり記憶に残っていない。歌の中には、はっきりした歌の記憶としてではなく、色々なものがぼんやりしたものとして詰め込まれているようである。

歌から導かれてくるものもあれば、その時の気分から溢れて出てくる歌もある。「岳人のうた」は私にとってどちらにも欠かせない大切なものである。



歌は世に連れ

15期　舟田節子

「僕はね、吉永小百合と小・中同窓なんだよ。ピアノもね、彼女のお母さんに習ったんだよ。どうだっ！真似できねえだろ！」

それが、シングルの遠因になったものか…東京電機大ワンゲルＯＢというＴ氏は、年季の入った歌集をひろげながらそう言った。

ここはネパール、アマ・ダムラムの懐のようなパンボチェ村。７歳違いなら、同じ時代背景の側になってしまう彼と、懐かしいワンゲルソングを、キッチンからの煙にむせびながら歌った。節回しが微妙に違うことよりも、同じ部分が８割以上であったことの方に感じ入ってしまった。

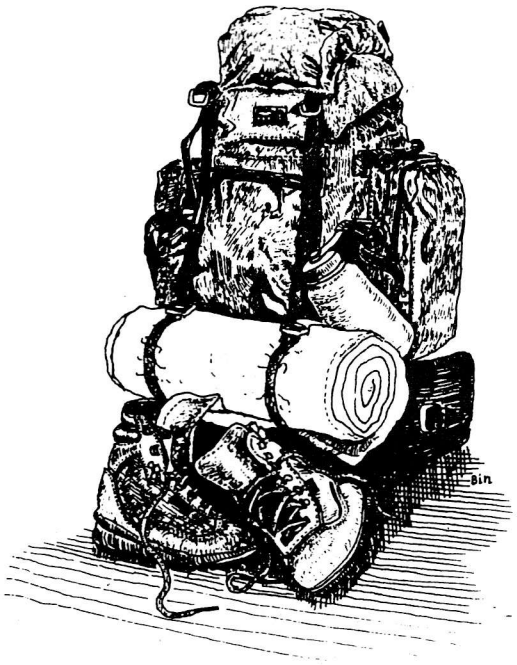
「そうですよね。あの頃、飽きもしないでこんな歌を毎晩歌っていられたんですよねえ」若者のバックパーカーが隆盛で、青春ソングを頬染めて謳い上げていた時代だ。それもまもなく、フォークソングや、独白めいた歌詞の歌の数々に席捲されていく…。やはり、「一つの時代だったのだ」というしかない。

現役当時、サボテンのような表紙絵の歌集の在庫が尽き、私は歌集編集委員長をやった。新しい歌をセレクトすると同時に、載っているけれど、誰も知らない歌の再発掘も試みた。

まずは編集委員をゾロゾロ連れて（覚えさせると称して）、美声の先輩辰野さん宅に押しかけた（当時は地元組の家族も、ワンゲルのとばっちりを受けて大変でした）。

カバーできなかった歌は、いくつかのワンゲル部にカセットを送り、「知っていたら、吹き込んで下さい」と、お願いした。そんな唐突な要請にも応えて、聞きづらい混成合唱がちゃんと返送されてきたことにも「そんな時代だった」の思いが強い。合ワンなど交流の度、新たに仕入れられてきた歌があった。

歌を共有でき、時代を共有できた、幸せな時代だったのだと、今にして思う。



子守唄
白山の尾根

17期　川村高弘

栂君からの　突然のメールで　一気に　30年前にタイムスリップしました。

我々17期は　こうした場にほとんど　登場しないのですが　同期の　さらっとした
それでいて会えばすぐ昔に戻られる付き合いが　気に入っています。

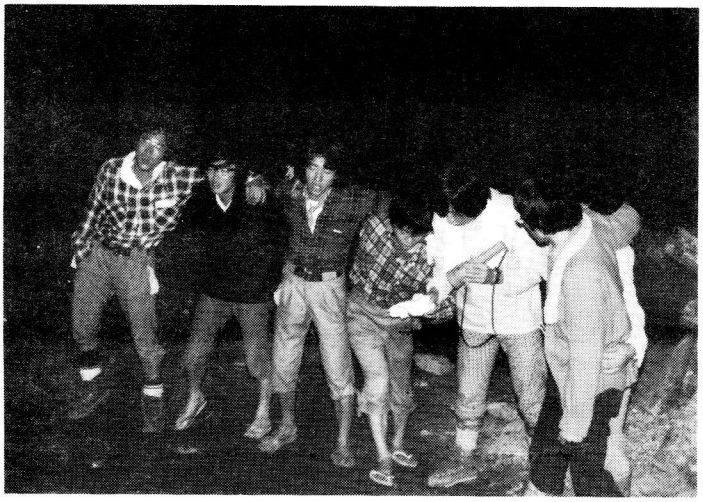
私は　イギリス3年半　アメリカ8年半と　計12年海外暮らしをしていて
現在は　アメリカ西海岸の　サンディエゴに住み
メキシコに　毎日　国境を越えて通勤する生活をしています。

さて　ワンゲル歌にまつわる　思い出ですが
それは　イギリスの　ウェールズで　長女が　生まれたときのことです。
泣き声やまぬ娘を　抱き上げて　あやすときに　何故か理由は　わからないけれど
思わず　白山の尾根　を　歌いながら歩き回りました。
“おっはいやー　おっはいやー　おっはいやー”
なんの事かわからない言葉を繰り返すので　うちの妻が　「何　その変な歌は？」
それ以来　私の子守唄は　いつも　白山の尾根
4年後に　長男が生まれた時も　やはり　白山の尾根
特別　好きなわけでもないのに　結局　我が家で知られた　唯一の　ワンゲル歌となりました。

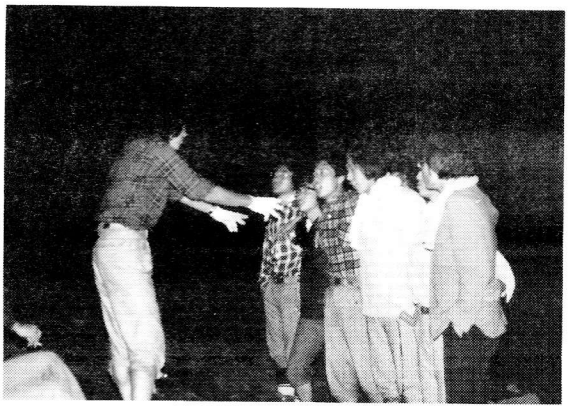
そのような娘も　今は
私がワンゲルにいた時と全く同じ年齢の　大学生
スキューバダイビングのサークルに入っています。
確か3年程前に　私がどこの　大学を卒業したのかと聞いてきました。
私が　金沢大学出身だと言う
それは　彼女の思いもよらなかった事らしく　びっくりしていました。
そのようなわけで　金沢の思い出も　伝統の子守唄も　継ぐ人間もなく　私一代限り。

おっはいやー　は　いいとしても
その後の　なるはー　らいらいよー　らいらいよー　って
いったい何の意味なのでしょう…？

ワンゲルＯＢ愛唱歌



18期　大西正明



話は３３年前に遡ります。入部したての私に１冊の小さな本（５cm×８cm×２cm程度）を先輩から渡されました。買わされました。確か２００円か３００円か。その表紙に、あまりうまくもない山と花の背景画と「ワンゲル歌集」と銘うった本でした。その中には、山に関する歌の他に四高寮歌・応援歌、当時の流行歌数点が手書きで書かれておりました。もちろん、山へ登ったことのなかった私には、この本が山登りと何の関係があるかは知る由もなく、奇異に感じた次第です。後にしてその用途を知ることになったのです。

今の現役生は、山の歌を歌うこともなく、歌集の存在すら知らないと言うことを伺いました。ましてやテントの中で合唱などまず以ってあり得なく、多分、狂気の沙汰としか思われないのではないかと思います。私自身もたまにカラオケボックスは行くことはあれど、ワンゲル愛唱歌を歌う機会など社会人となってこの方同窓会を除けばありません。

しかし、当時はワンゲル歌を相唄うことは重要な意味合いを持っていて、

・夕食の後の一日の疲れを癒すための発散材料（これがテントの中での合唱）

・沈殿時の暇つぶし（何もやることがない、他に遊びもない、芸もないため、トランプに興じるか、唄うことしか若いエネルギーの発散方法がない）

・中には自分に歌唱力があるとの錯覚に陥って、後輩への指導と称して唄い、唄わせ自己満足に浸る（これが伝承されていくうちに、本来のメロディとかけ離れていくが、誰も正確なメロディは知らないので正調と誤解する）

・第〇〇期の歌として、宴席で披露することにより連帯感を醸成する　　などなど。

今思うに、若さというエネルギーの持って行き場の一つがワンゲル歌であり、それを媒介として仲間として連帯感を養い、強い人間関係に支えられた集団を形成していったような気がします。もちろん、苦しい思いをして山の頂上を制覇したことも、汗水足らしてやった小屋作業も、先輩、後輩を問わず強い絆を作り上げていった大きな要因ですが、ワンゲル歌もその一翼を担っていたような気がします。

現役生にとってあまりピンと来ないかもしれませんが、我々の時代はそうであったし、良き習いであったわけで、今の人たちは今の人たちで別の形で仲間同士のリレーションシップを作り上げているのでしょうし、私たちの知らないうらやましいものを持ち合わせているでしょう。時代が変われば、人間関係のあり方も変わって当然です。

前置きが長くなりすみません。当時、よく唄ったワンゲル歌を２、３紹介します。

★「懐かしのメロディ　その１」
“穂高よ、さらば”

ワンゲル歌は、基本的に単調でスローテンポ、叙情的なものが多い。従って、余程の音痴でなければ誰でも唄えるし、誰が唄ってもそれなりに聞かせる歌になる。この歌もその一つ。何故、この歌を最初にあげたかというと私の十八番だったから。これを持ち歌として後輩への歌の指南を行なったのである。歌の上手い先輩に恵まれた後輩は幸せだ？？。

１年の合宿は北アルプス、双六から西鎌尾根に上がった時に、ガスが一瞬引いたそのとき青空の中、目前に現れた厳しい岩肌のこの山を見たとき、本当に来て良かったとその時だけは思った。今でも鮮明に記憶に残っている。

その合宿で教えてもらった歌がこれ。

♪♪穂高よ、さらーば。また来る日まで・・♪

この時代はフォークの全盛期、かぐや姫の「神田川」があった。

★「懐かしのメロディ　その２」
“白山の尾根”？（題名が正しいか判らない）

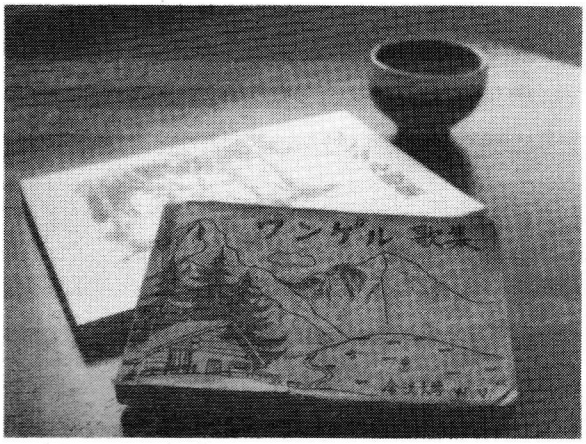
これは、まわし歌。♪♪はくさーんの尾根のー、ふーーもーと（麓）の、牛首のなーがーれ（流れ）、いーわな（岩魚）が捕れるゥ・・・♪。２題目が「白山」が「穂高」、「牛首」が「梓」、「岩魚」が「やまめ」。３題目が「ヒマラヤ」、「ガンジス」、「鯨」。まわし歌だから、次々と歌い手が変わる。４題目からは、ローカルになる。「高三郎」、「倉谷」、「おろろ」。

ここからは、更にローカルになって、「堂川山」、「堂尻川」、「大西（その時の歌い手）」。はっきり言って誰も知らない。自分が生まれた田舎を歌にしただけ。延々と続くので、そのうち皆、飽きが来て唄わせてもらえない人も出てくる。なんと時間にゆとりがあったかがわかると思う。これを書いてる本人も暇な人間と自身思ってきた。

因みに、このときの対抗馬は天地真理。♪♪あなたを見たの、テニスコート。ランラン♪沈殿のときは、明るい歌がいい。

★「懐かしのメロディ　その３」
“？？？”（題名を忘れた）

♪♪せんぱーい、リーダーは雲の上。憎ーい先輩に騙さーれてェー、入ったところがワンゲルよォーー。♪。恨み節。重い荷物、食器洗い、テントの設営、撤収は合宿とはいえ、一年生の仕事。何がトレーニングだ、封建制度が今も続いているのかと憤った。学年が上になると、やはりこれが正しい、上になれば責任が伴うものだと勝手に納得。



今でも唄えと言われれば、歌詞はおぼろげながらもメロディは覚えているので仲間がいれば唄えるかなと。しかし、山小屋やテントで歌ってたら貧粛を買うでしょうね。たまに、風呂場で鼻歌に出てくるとワンゲルの生き残りであることを感じます。

あー、いけねえ、OB会費払ってねェ。栂さん、原稿料要らんから許せ。

長々と稚拙な文章を書いてしまいましたが、ワンゲルの歌ってそんな感じです。

大野さん、とりあえずこれで我慢して。

バッチリですよ！大西先輩。トトロ会長は読みながら５、６回笑い、O事務局員は、読了後、パソコンの画面に向かって拍手を送ったくらいですもん。それにしても、自分の声に酔うように目をつぶりながら歌ったという大西先輩の唄姿、見たかったなぁ…（事務局）

ユーミンが好きだった

21期　大野直子

テントの奥と入口では、昔から、居心地も、蒸し暑さや寒さも、緊張感も、天と地ほども違っていた。奥側とはもちろん、リーダーや上級生が陣取る場所。入口側とは、テントのファスナー付近で、１年生たちがヒシと食当に励む場所である。入口から奥を見ると、リーダーたちは雲上の人々のようにも見えたものだ。

もっともこんな状況が成立するのは、だいだい色の重たい木綿製のテントだけ。今はあんなテント、山の遺産なんだろうな。きっとお椀型とかのエスパースで合宿もこなすんだろうな。

まぁそんな、テントが、家族の入る、ちゃんとした家みたいな形をしていた時代のお話。

私が１年生の時。 犀奥は大笠山での春山合宿でのことだ。２つ玉低気圧がやって来た。テントは吹っ飛ばされるは、けが人は出るはで、一歩間違えば全パーティ遭難、「ＫＵＷＶの行動に疑問？！」みたいなタイトルが北國新聞の一面に踊ってしまいそうな山行だった。

数パーティ編成だったが、私がいたパーティのテントは幸い、吹き飛んだり裂けたりという災難からは免れた。でも、テントの中は水浸し。寒さと恐怖でかなり切羽詰まった状態だった。多分、雲上の人々は、内心真っ青になりながら、如何にしたら全員無事に下山できるかを必死に考え、ひそひそ話をしていたのに違いない。

私には、そんな状況下での、歌にまつわるささやかな思い出がある。

奥側の緊張感とは反して、意外に１年生側は楽観的で明るかった。こそこそポップス談義なんかをやらかしていたくらいなんだから。

ちょうどあの頃は、井上陽水の『氷の世界』やユーミンのファーストアルバムが驚異的に売れた年だった。それまでの泥臭いフォーク全盛時代に、軟弱派ポップス系の、つまりニューミュージックなるものが台頭しはじめていたのだ。

１年生の男子のひとりが言った。

「ユーミンの詞って、軽々しくて嫌いや」

「えっ？　なんで？」と、私。

「だって、『ソーダ水の中を貨物船が通る』なんて、ぜったいありえんやろ」

「そんなことないよ！　きっと海が見下ろせる高台の喫茶店やから、ソーダ水のコップのこっち側から見たら、ソーダ水の中を貨物船がゆっくり横切って行くように見えたんやよ！」

私はちょっとムキになって身振り手振りで説明したんだと思う。すると、その男子はじめ１年生のみんなが「そっか、なるほど」と、妙に納得してくれたのだ。１年生は朝一番にシュラフから飛び出してブスに圧をかけて…と、ある種、戦友だ。その戦友たちが素直にうなずいてくれたことが、私にはなんとなく嬉しかった。

ただそれだけの話。

だけど、この小さなことを思い出すたび、テントの奥と入口の温度差みたいなものや、あの頃の純真さが思われて、胸がふつふつ泡立つ。

山の歌も四高寮歌もフォークも大好きだった。でも、ユーミンのキレイキレイし過ぎているけど、彼女がちゃんと見ている夢みたいな世界に魅かれた。「夜明けの雨はミルク色～♪」と彼女が歌えば、キスリングを担ぎながら見た４時出発の早朝の霧雨が、本当にミルク色に見えたのだから、困った。若かったなぁ。

こんなオバサンになった今も、夢見る夢子さんからはまだ卒業できないでいるけど…。

ワンゲルの歌も、中島みゆきも、拓郎も、赤い鳥も、ハイファイセットも、イルカも、よく歌ったな、あの頃。

唄ったこと

22期　森　恵利子

久しぶりにワンゲル歌集を開いてみた。遠景に山があってその手前に杉木立があって山小屋がある。一本の道に花が一輪。右下にN.T.とたちの期にとっては歌集と言えばこれだった。小さなイニシャルの入ったB7版の物。私山行の度、忘れずザックに入っていた。

カラオケのなかった頃だったから、一人で人前で唄うなんて経験はなかった。夕食後のひとときの中のほのぐらいテントの中だけ、山の中のほのぐらいテントの中だからこそできたのかもしれない。順々に、そのいい人そのの人の声に浸る時間が流れていく。渋キ声、ふんわりした声、透き通った声、ハスたくさんの歌、人に出会った。村中さんの歌声は今でも忘れられない。

みんなで唄う歌も好きだった。山道を歩きながら・・・、下山路の林道を歩きながら「山のっ子」を何人もで唄った記憶がある。体はぐったり疲れながらも、弾む心での林道下りのテンポにぴったりだった。楽しかった。

飲み会では肩を組んで唄った。照れながらも心地よかった。「ライダース　インザ　スカイ」私たちの期はよくこれを唄ったように思う。切ない歌詞なんだけど、好きだった。酔いながらも唄える歌だった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

卒業してからの山行は、小屋泊まりが多くなってしまった。歌集は本棚にしまわれた。あの歌は「ワンゲルの歌」だったんだと、今さらながら思う。

またまた再会の時に唄いましょう。

金沢大学ワンダーフォーゲル部の歌　募集！

私たちは、テントの中や新入生歓迎コンパ、追い出しコンパなど、さまざまな場面で「山の歌」を唄ってきました。OB諸氏の中には、青春の思い出と切っても切り離せない歌も少なくないのではないでしょうか？

しかし、私たちの部には独自の歌がありません。すでに千名に近いOB・現役部員がいる中で、歌のひとつくらいできるのではないかという、はなはだ独善的かつ楽観的な思いつきではありましたが、私たちがOB会役員に就任した45周年の総会で、08年の創部50周年を記念して、金大ワンゲルの歌を制作してはどうかと提案しました。

マニフェストの実行というわけではありませんが、OB会の事業の一つとして、私たちの歌ができたらいいなと思い、このたびOB会員及び現役生の皆様方から「歌」を募集することにしました。皆様方の積極的な応募を役員一同、心からお待ちいたしております。

募集要項

1. 募集する歌の種別は、「部歌」または「OB会愛唱歌」とします。応募に当たっては、次のいずれかを明記してください。　＜部歌＞　＜OB会愛唱歌＞　＜どちらでもいい＞
2. 募集の対象は、「歌詞」、「曲」または「作詞・作曲」のいずれかとします。
3. 歌詞の形式は自由です。ただし、原則として最大4題目までとします。
4. 曲の形式は自由です。提出は五線譜でお願いします。
5. 応募の締め切りは、2006年6月末日とします。
6. 選定の手順
   選定委員会（現役員とOB・現役生のうち希望する者及び役員会が依頼した者）を設置し、選定させて頂きます。選定委員を希望される方は、2006年6月末日までにお知らせ下さい。
7. 摘要

＊選定委員会で、または作者に依頼・相談して、補作・修正・編曲をさせて頂くことがあります。
＊著作権は、原則として、金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会に属することになります。
＊応募状況、その他の理由により、制作できない場合があることをご了承ください。

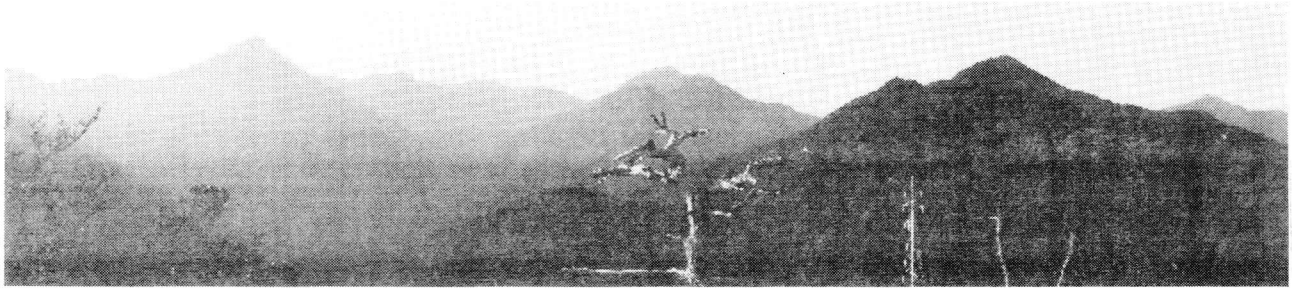
【参考：制作のスケジュール案】

06年　6月：「歌」及び選定委員の募集締め切り
　　7月：第1回選定委員会＜募集状況及び今後のスケジュールの確認＞
　　12月：第2回選定委員会＜応募作品の『やまざと』・HP への掲載、意見照会＞
07年　7月：第3回選定委員会＜候補の絞り込み・選定、意見の反映、補作などの検討＞
　　12月：第4回選定委員会＜候補作の『やまざと』・HP への提示、意見照会＞
08年　7月：第5回選定委員会＜意見の反映、補作・編曲、決定、譜面作成・録音？＞
　　X 月：50周年記念総会にて発表・制定

やまざと写真館－1

11期　加藤忠好

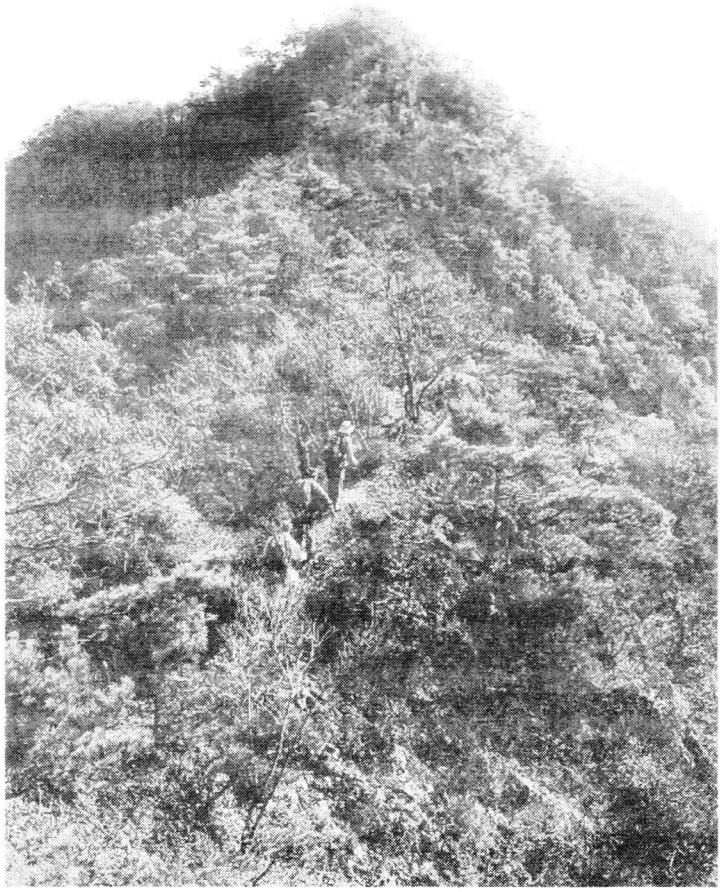
西播磨の名峰「七種山(ナクサヤマ)」



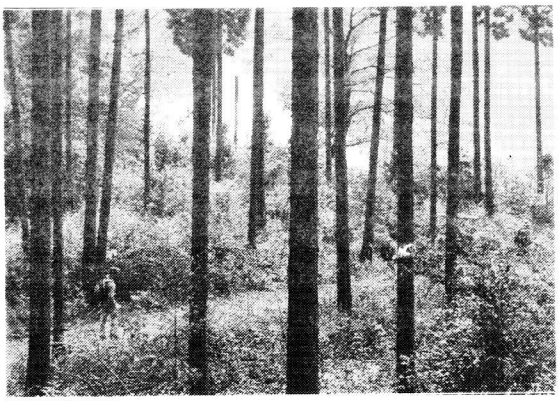
七種山三山

鉄塔付近にて

岩稜を行く



さわやかな杉木立の中



メール宅急便「特別寄稿」

カラコルムトレッキング

15期　舟田　節子

カラコルムトレッキング

（ディラン・ラカポシ・ベースキャンプとメルヘンの草原　１１日間）

平成17年８月５日～15日

記録係：15期　　舟田　節子

◆メンバー

長岡	正利	11期	国土環境㈱
長岡	礼子		小学校教員
上村	人史	〃	日立ソフト
舟田	節子	15期	塾指導者
Ｙ			国土地理院ＯＢ

“中央アジアの屋根”カラコルム。世界第2の高峰K2をはじめ8,000m峰が4座、7,000m峰なら実に60座以上もある白い巨峰また巨峰の世界です。東のネパールヒマラヤと並ぶ世界的スケールの豪快な大山脈であり、8,000m峰の数でこそ一歩譲るものの、高峰の密集度ではむしろネパールヒマラヤを凌いでいます。さらにカラコルムは極地帯を除けばもっとも長大な氷河が発達している地域です。

また、カラコルム山脈は中央アジアの5つの国が出会う要に位置しています。延々550kmの長さで連なるこの大山脈を越えて南のパンジャブ平原と北の中央アジア高原とを結ぶルートは、古くからシルクロードのひとつとして、また、インドから中国を経て遥か日本へ至った仏教伝来の道として、あるいは紀元前4世紀のアレキサンダー大王の遠征など征服者の路として、南北双方からの数々の異なった民族や文明の足跡が刻まれた舞台であり、興味は尽きません。

◆プロローグ

「キリル文字というのは、ようするに発音記号でして…」

なんと、ＫＵＷＶ・ＯＢ会初海外遠征ＰＷは格調高く、ロシア文字のレクチャーから始まった。

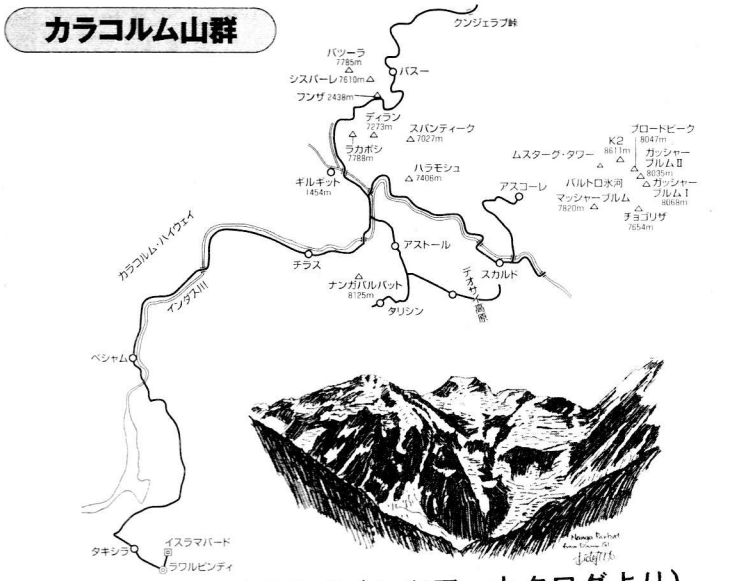
当然というか、必然というか、ＰＷ参加者には予習用に、長岡先輩ならではの各国製の新旧カラコルム地図が惜し気もなく送付されてきたのだが、「豚に真珠」＝「節子に地図」。カタカナ地名でも覚えきらんのに、アルファベットまでカバーできる訳がない。でも余りに申し訳なくて、前日、やっとこさ貼り合わせ作業だけは終わらせて、さも勉強したふうに持参した。このあたりから、気分はもう苦学（＝綱渡り）の現役時代に戻ってしまっている。

幸いに、上村先輩は私と同じレベルのようであり、地理院ＯＢのＹ氏の方は、さすがに楽しそうに眼鏡をずり上げておいでた。そして礼子奥様の方は

「私の部屋も、娘の部屋にも集めた地図がはみ出していて、地図さえ前に置いておけば、何時間でもじっと眺めて楽しんでいるのよ！」

どおり、ああまた始まった…のため息が漏れているようだった。

ともあれ、最初は長岡ファミリーの家族旅行として企画されていた「ディラン・ラカポシ・ベースキャンプとメルヘンの草原１１日間」。単価引下げも兼ね、カラコルム入門コースとしてワンゲルＯＢにも公募の結果、当初の成年お子様達は所用で抜けてしまい、上記５名の参加に落ち着いたのだった。



（アルパインツアーカタログより）

私はといえば、「夏休みにはバルトロ氷河（カラコルムのＫ２を見る）トレッキングを」と狙っていたが、さすがに２６日間の留守にはいくつものハードルがあった。無理の結論が出そうで、「同じカラコルムなら」と、即日決定してしまっていた。その後は「入門コースで楽」と、誘うのも功徳のうち（？）とばかり周囲に声を掛けてみたが、みなさん「孫が生まれそう」「主人の留守と重なる」「老親入所の手続き中」などの都合があり、「会社の休みと微妙にずれる」もあった。かえって今、自分がいかに「行け」とばかりに青信号が連なっている状態なのかを自覚することになった。「行ける時が、行き時！」

それにしても、５月にシッキムに出掛けたばかりで、身辺整理は済み、医薬品他買い足す物

もなく、息子に学研を任せていくマニュアルも出来上がっていてわずかな手直しで済んだ。一度ハードルを越えてみればこんなに楽になる！そんな余裕プラス、メンバーは先輩とあって、対人緊張もない。本当に、本当にＰＷ気分で、成田のカウンターに立った。

（なお、この記録は長岡Ｌの校閲をうけています。＊が長岡Ｌから指摘があり、ＫＵＷＶ・ＯＢの知的向上のため加筆した箇所です）

◆８月５日　***成田→イスラマバード***

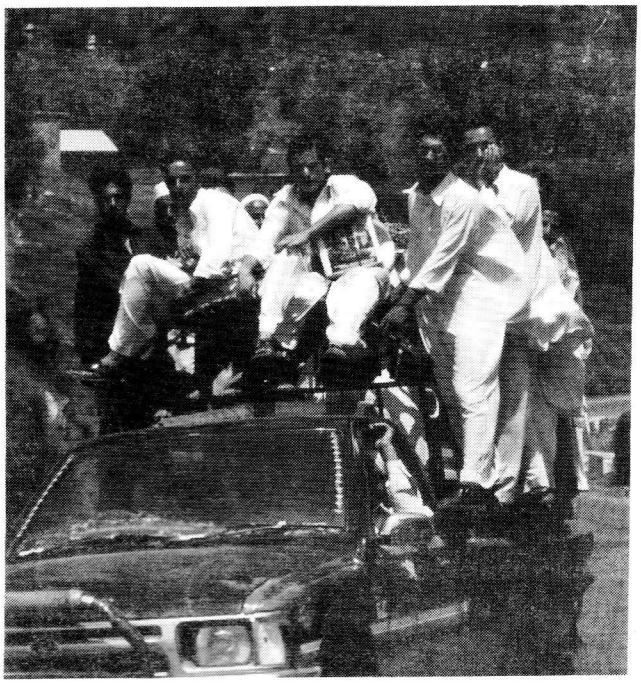
パキスタン航空は、成田の駐機料が高いためにトンボ返りで、離陸。以前は楽しめた夕映えのカラコルム、朝焼けのカラコルムは、そんな事情で拝めなくなったのだという。ともあれ、お愛想もなく機内食が配られ、続いては「窓を閉めろ」（食ったらさっさと寝ろ）と、威圧的で、あまりサービスをされている側の気がしない。（イスラム国のため、ビールやワインが出なかったのも、そう感じた遠因…）

ジェットはほぼ真西に飛んでいる。かいま見る下には沙漠（＊砂漠ではない。→ほとんどは砂ではないのが理由。）が広がり、次には天山山脈らしい雪山が流れ、そして夕映え色の雲海になる。その夕映え時が、西に向かって飛ぶために長々と続く。それがいよいよ暮れなずんだ頃、稲光に山のシルエットが浮かぶようになった。ジェットから雷ってこう見えるのかと、感心しているうち高度が下がり、イスラマバードへ。

ムッとくる熱気。そこに稲光が加わる。ど晴天の地と思い込んでいたので、この驟雨にはびっくり。出迎えの群衆を抜けた所で、ガイドのベイグさん登場。長岡さんご指名のガイドだ。今年は天候不順、昨日から荒れているそうだ。夜１０時を過ぎても人気の多いホテルの入り口には、金属探知機が据えられていた。奇数人数とあって、追加料金なし（個人的には）で私はシングル部屋なのである。ラッキー！

◆８月６日　***専用車にてチラスへ***

今日は一日、コーチに乗る。知らない国のウォッチングは楽しい。服装から、車から、市場



から、流れる景色はすべて異国だ。ＳＵＺＵＫＩやＴＯＹＯＴＡが後ろに大書きされていて、多いだけでなく、ステイタスでもあるよう。そんな文字をご丁寧に刺繍して飾っている車まであった。すし詰めに乗った車の、さらに上に、後ろに、人がぶら下がっている。あれも料金を払っているのだろうか？満艦飾のバスにトラック、小型タクシー。そんなカラフルトラックは、絵はがきにもなっていた。

車窓を流れる果実の山がおいしそうで、ベイグさんに買ってもらった。こんなことを自由に頼めたり、好きな所で写真撮影に停めてもらえるのも、少人数個人手配旅行の醍醐味だ。

歩いているのもたむろしているのも男ばかり。わずかな女性達はほぼベールをかけている。買物も男の仕事で、基本的に女性は家の奥にいるものらしい（日本もとりあえず「奥様」の言葉はある）。私…国の外まで出てきてるわよ！

水田地帯をぬけ、谷が深くなってきた所で、インダス河との合流地点に出る。圧倒的な水量。さすがにインダス文明を刻んだ悠久の大河だ。この灰色の泥水は氷河に由来し、削られた岩石粉末のためだそうだ。タコット橋を渡ってからがカラコルムハイウェイとなる。主に中国が、ここからカシュガルまで、辺境の大動脈として建設した車道である。建設記念碑はかなり走ってからあった。

舗装道路の路面はもう傷んでいて、揺れるはガーンと突き上げるは…。追越すのを当然に飛ばし走る道路には、ほとんど橋はない。あらゆる谷を奥深く入り込んでから曲がる。「犀川ダムの手前の切れ込みなんて、かわいい」で通じてしまうのが今回のメンバー。どうしてチラスまで１１時間もかかるのか？が、納得できた。

チラスの宿はハイウェイ沿いに建っていた。昔から熱気のたまる盆地で有名な所とか。部屋の冷房は、天井プロペラと壁の水冷式扇風機。贅沢はいえないけれど、器具の騒音がきつい。

◆８月７日　*→タトー村→メルヘンの草原*

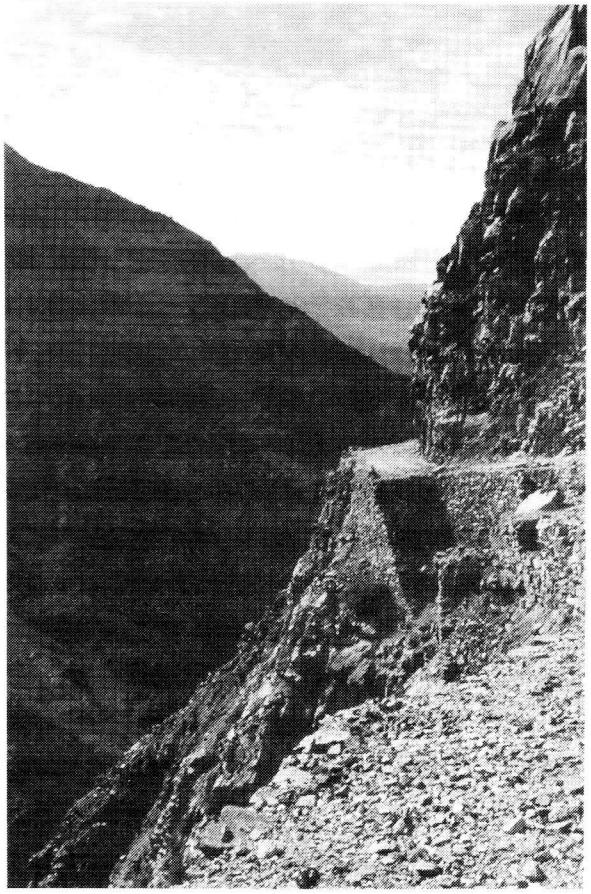
みんな早起き。トレッキングの今日は少しでも早出がいい。でもベイグさんは言った。「早出でランチボックスを頼むと、夜の残り物をいれられてしまう。朝食後なら、朝作った物を入れるから安心です。」なるほど。

河原の壁画に寄った。仏像と宝塔の線刻だ。こんな荒涼の地に昔往来した人々。そこまでの信仰があって、どうして仏教は滅び、イスラム教に変わってしまったのだろう？三蔵玄奘が西域を旅した時には、丁度仏教の隆盛時代で、王侯諸氏に丁重にもてなされ送迎も受けたらしい。イスラム教に変わり、揺り戻しもなかった点からいえば、この風土に真に嵌まった教えがイスラム教であったのだ。ただ、私達の旅行中には礼拝する姿は一人しか見掛けず、夜明け前のアザーン（＊「お祈りにいらっしゃい」のスピーカーの声）も、イスラマバードでの朝、かろうじて聞こえたぐらいだった。

インダスはひたすら滔々と流れる。長岡先輩からは予習の本まで送って頂いていた。その井上靖も同行したという『カラコルム紀行』には、インダスの流れを、いろいろな副詞で表現してある。予想はつくが読めない副詞もあった。インターネットで何でも調べられる、遊べる一方で、文語体のボキャブラリーは欠けていってしまう。でも、そういった言葉に置き換えられなくても、自分の目で見た感動は、ナマで入り込む。「百聞一見にしかず」が、旅へと駆り立てる。

造山運動は、その摩擦熱での温泉ももたらすとのことで、道路脇のどうともない流れが温泉だった。禿山にするくらいなら、こんな熱源も活用すれば？だが、灌漑用以外の水資源は関心がもたれていないようだった。

荒涼の中の点景ともいえるライコット橋を渡り、ここからジープに乗り換える。かつて、パキスタン軍のある高級軍人が、木材搬出のためこの谷奥まで車道をつけたとのことだった。最初から内臓もひっくり返りそうな揺れだったが、それが緩い斜面をトラバースした後は、とんでもない絶壁をつたうようになる。ガードレールがないのはともかく、石に乗り上げた弾みで簡単にコロンといきそうな…。遮る物もない展望とはこのことか、全開放のジープの前も下も、剥出しの大地が傾いている。路肩はすべて石積みで、パキスタン人は、伝統的に石積みが上手とのことだが、あのわずかな出っ張りがいつ崩れたっておかしくはない。そのうえに前走車が停止。ん？と思ったら、運転手が下りてタイヤの上のボルトを締め直していた。ほんに寿命



が縮んだ。

後ろの渓谷の上に白銀の山（＊左がラカポシ、右がディランの南面）が見えだし、前方にナンガパルバット（世界第９位の高峰 8125m）が見えだした頃、ようやく谷は浅くなり、トウモロコシ畑が広がるようになる。南北に長いタトー村の、南端の横が終点。車道はさらに続いているのだが、土石流で塞がっているのだった。あんな絶壁道を維持、走行できるくらいなら、この程度の補修はわけもないように思えたけれど、ここからポーター仕事を確保するのが、村には好都合なようだった。

村人がワッとベイグさんを囲んだ。雇われたのはあまり年端のいかない少年達で、ロバ２頭が補佐についた。

恐怖のジープ走行に比べたら、地に足がつくだけマシと思えたが、登り出すと暑かった。道はかつての車道で、それが徐々に森林地帯に入っていく。乾燥地帯では、標高が上がると気温が下がり湿度もあって樹木が育つことになるのだ。かつてはもっと下にも樹木はあったそうだが、それが伐採されると回復は叶わず乾燥地帯はさらに広がり、禿山を増やしているらしい。

トラバース路に入り、ぐいぐい標高が上がると一気に氷河が見えだした。岩屑に覆われた舌状のグレーゾーンがライコット氷河なのだ。氷河の両脇に残されたモレーンが針葉樹林帯となり、メルヘンの草原（メルヘンヴィーゼ）はその左岸側の台地である。もの綺麗なＴＳにテントとケビンが並び、その続きは牧場になっていた。舐めるように刈り込まれた敷地は、すべて家畜達の食んだ跡なのだ。氷河の上に聳えているはずのナンガパルバットは裾しか見えない。おぼろげな輪郭の小山の裏に、ＢＣはあるそうだ。

ケビンはトイレ付き、なしのレベルが混在するが、基本的にはツインで、ベッド２台が入った独立棟型である。こんな所の離れたシングル棟はちょっと物騒で、結局私は長岡ケビンに紛れ込み、片方のベッドを占有させてもらうことになった。一番高台にあり、氷河が真横に見えた。

食事棟のロッジには煌々とプロパンガス灯がともった。個人手配旅行とあって、日本食の副菜の数々は、長岡さん夫婦が買い揃えてきて下さった物。でも、ドイツ人テーブル、中国人テーブルも広がった中で、ジャパニーズテーブルが一番ライスが余っていた。何かと「慣れ」の余裕を自覚できた私も、「インディカ米」のみは拒絶が増幅。私だけではなく「何で日本人はお米を食べないのか不思議だろうね」と言いつつ、誰も次の「もったいない」が出てこない。珍しいならともかく、似て非なる物はかえって「違う！」が強調されて、食欲減退になるのが食文化。さらには「主食」の存在感かもしれない。一方完熟のマンゴーは、大好評だった。

◆８月８日　*→タトー村→フンザ*

今朝もナンガパルバットは見えない。時間は十分にあるので、傘をさして朝の散歩にでかける。森林のモレーンの氷河側はばっさり切れ落ちて、どこからも氷河展望が広がる。道がモレーンの右にずれていくと、小川が流れる森林浴コースである。どこにも糞が落ち、そこらじゅうが緑のカーペット…過放牧で舐めるように食まれた跡の、掻き分ける丈もない草地が延びている。メルヘンの草原というからには、高山植物が群れ咲いているのかと想像したが、食まれ

た後にわずかに紛れ咲かせている程度だった。バイヤールキャンプと呼ばれるＢＣの手前にある、タトー村の夏村まで着いたが、やはり雲は重い。放牧の羊達が珍しげに近付いてき、その後は番をする子供の指示通り、木橋を渡って対岸へ広がっていった。

「孫悟空はお釈迦様の掌を越えられなかったということだけど、僕達は、家畜の領域からは離れられないみたいだね」と上村さん。圧倒的な自然の、そのとんでもない谷奥にも人は住みつき、家畜で舐め上げたような自然を広げているのだった。

下山は早い。ところが、一難去ってまた一難ともいえるジープは、タトー村からさらに徒歩一時間下までしか来ていないという。ベイグさんがすれ違った人から、今朝の崖崩れでそうなったと情報入手したそうだ。「まだ１時間！」と村を見下ろすと、何と次々ジープが登ってきている。開通したのだ！こう簡単に開通して、一方目前に広がる土石流の方が除去不能な類の物とは思えなかったが…すべては人間様の知恵と都合なのであろう。

加速気味になる下りは余計に身震い物なのに、浮かれた運転手であった。礼子さんと私が思わずあげる悲鳴に、ニヤニヤと横を見るは、頷いて振り返るは…いかにも楽しげ。エエイ、ちゃんと前を見ておれ！

フウッとばかりライコット橋（これも含め、多くの橋は撮影禁止）に着いた。さすがに、乗り換えてからのカラコルムハイウェイの凸凹は全く気にならなくなった。

ギルギットの外れで、コーチは突然停まった。「運転手さんの家です。」鉄門扉のある豪邸！奥さんと次々出てきた子供達が、何種もの果物の盛皿をにこやかに差し入れしてくれた。運転手は高給職なのだそうだ。

遅い昼食後（その結果、夕食は断る）、フンザ入りは夜８時になった。わずかな灯りの下でまたもジープに乗り換える。アルパインツアー社推奨の眺めのよいロッジということだが、地形はもうさっぱりわからない。悪路の巻は済んだと思っていたのに、またも会話のできないほどのロデオ走行。狭い石垣の間を抜け、真っ暗闇を跳ね走り、このまま辺境でまとめて行方不明かも…の先にロッジはあった。意外に瀟洒で光あふれ、狐ならぬ、欧米人家族が遅い夕食をとっていた。トレッキングの汗と疲れ（ジープの埃も）が、快適に流れ落とせた宿だった。

◆８月９日　*→ミナピン→ハパクンド*

明けてようやく景色とご対面。緑のオアシスフンザ盆地が広がっている。でも山並の雲は重く、秀峰ラカポシも、時折右稜線を見せるだけだ。

昨日から、「この天気が続くなら、トレッキングをやめてハイウェイを北上するか」の次善策も浮上していた。「あと１時間もしたら、ラカポシが綺麗に見えるようになりますよ」と従業員。「じゃあ、晴れてくるのね？」と尋ねると小首を傾げる。パキスタンでは小首を傾げるのが“ＹＥＳ”なのだそうだが、サービス精神も考慮するとますます、え？どっちなの？

とりあえずＹさんの高級高度計が、気圧の上昇傾向を積算表示しており、これが一番の判断材料となる。カラコルムのイメージ「抜ける青空」が見られますように…。予定通りのトレッキング実施と決まる。

出立の間際、長岡さん知己の画家に出くわした。「こんな所で！」と双方びっくり。辺境に長期滞在、そこでの景色をテーマにしている人で、日本では地図手配での接点があったらしい

。彼は「このところ、３日ごとに天気が変わるサイクルになっている。今日からはよくなるね」と言ってくれた。

昨夜、魑魅魍魎の入り口かと思ったこのホテルは、さらに増・改築されるらしい。立地は今朝ようやくわかったのだが、すぐ裏にビューポイントの砂岩（＊砂のように風化した片麻岩）の丘があり、ほんの３分の登りで、３６０度展望とサンライズ、サンセットが楽しめるのだった。ベイグさんが「ギルギット泊、ここでサンライズを見るツアーもあります」と言っていた。桃源郷フンザは、世界の観光地になろうとしており、あの悪路も来年には補修されるとのことだった。

バルチット故城をまず訪ねる。石垣プラス木造りのそれは、長岡さんのかつての来訪時には倒壊寸前、端に寄るだけで揺れるほどであったという。それが世界遺産の指定をうけ、観光資源として補修された。「スコシ、日本語ヲベンキョウシマシタ」の日本語ガイドが案内する。スコシというから、一生懸命聞き取っていると、出来のいい冗談になっていて、ガイドがニヤニヤ、ニコッと笑い返す。語学というとまず縦筋が寄る私には、コミュニケーションの道具じゃないか！と反省させられる一幕だ。風を招く夏の居間、こもって暖をとる冬の居間、他は多くが貯蔵庫だった。外の撮影なら可で、王様のベランダからの景色を欄干越しに撮る。

フンザ川の両岸に緑の台地。スラッと天空に伸びるのは細身仕立てのポプラで、その間には、リンゴ、アンズ、スモモなどの果樹がたわわの実を付けて木陰を作っている。どこにも水路が通り、氷河由来の、グレーの油膜を浮かべたような（＊雲母片の反射によってそう見える）水が、ある所ではほとばしり、ある所ではゆったりとこのオアシスを潤していた。

観光地化の以前から要衝の地であり、人の往来が多く、女性も多い。アレキサンダーの東征以来、金髪碧眼の美女が住みついた地とあって、「パキスタンでは女性を見かけない！」の上村さんも十分に満足できたよう。本当に美男美女が多く、そんな人達が颯爽と裾を翻し、ないはさりげなくベールを掛け直していると、もうエキゾチック！

日本にだって「夜目、遠目、笠の内」の言葉がある。ベールの内ならなお有利、想像を掻き立てるというものだ。でも、礼子さんと私は冷静に達観したのだ…彼女達が当然のように鼻にひっかけるベールが、私達だと、絶対に留まりようのないことを…。メリハリのない顔とボディーの私達は、やはり「お着物」で頑張ることにしよう！

カラコルムハイウェイをやや戻り、南の脇道に入ってミナピン村。ここのロッジで昼食をとり、トレッキング開始だ。ロッジ庭にはナジール社からの天幕、テーブルなどの器材が置かれていた。あれよの間に村人が増え、食材類も山積みされた。今朝まで、次善策に変えるかの保留時間があった。もし、トレッキング中止にしていたら、この器材の手配から食材はどうなったのだろう？ベイグさんは、用意した食材はキッチンボーイ達が持ち帰り家で使うのだと言った。不測の事態があるのは当然としても…見えない所にも経費はかかっている。決して高いとはいえない旅費である。

やたら啼いているロバがいた。「イヤイヤ」としか聞こえない。ここでの荷役はロバだ。体高低く、パンダ目、大きな耳もあって見た目は可愛い。でもかなり強情そうではあった。前回のシッキム報告の反響に「どのページにも糞の記述があるのに、映像には一塊も出ていない」の指摘があったので、あえて転がりたてを撮影した。

コックとキッチンボーイの計２名、スタッフ２名、ロバ６頭、ポーター１９名が、今回のご一行様だ。村の灌漑用水脇を通り、崖を大回りして、氷河からの急流を渡ると、そこからモレーンへの急登が始まる。ポーターの少年達はごくごく普段着のまま、息を荒らげることもなく、抜き去っていった。ネパールにあった表象物はなく、岩に書かれた蛇がのたくっているような文字（＊ウルドゥ語）は、ロッジの宣伝のようだった。左に早くもミナピン氷河の末端が見えた。たかだか2500m。北面だからだろうか？

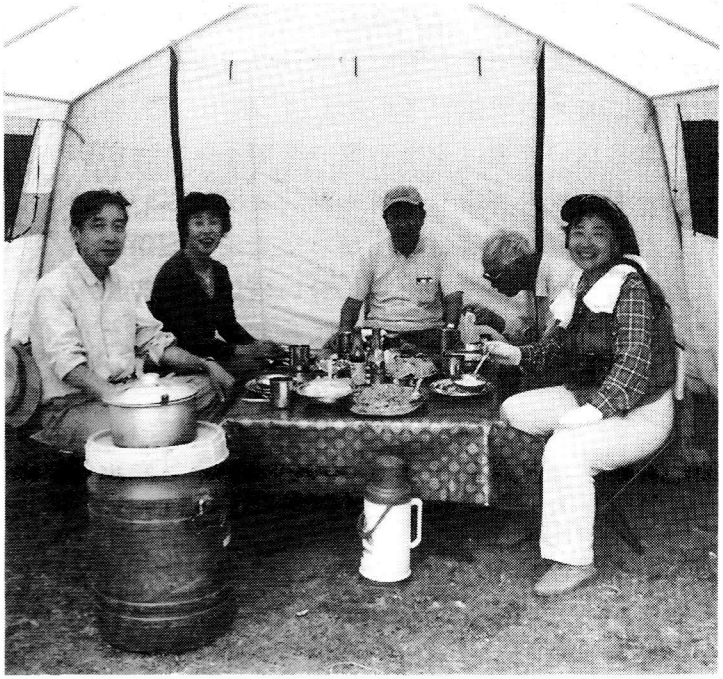
ここも次第に灌木が増え、樹高が高くなっていく。そして背後にバツーラ山群の白銀の峰が伸び上がってくる。谷を詰めると、前にも後ろにも白銀の山塊…の展開がカラコルムかもしれない。U字谷を詰めて、両脇に大山塊のエベレスト街道とは、また違う…いやいやもっと登ってからじゃなくちゃ、そんなこと言えないよ！

日差しはますます強く、濃い影に汗がしたたる。トレッキングの方を選択してよかった！ようやく平らになった牧草地に作られた日陰に、コーラ壜が飾られていた。そこにいた１０才の少年が「２５ルピー」だという。首から下げた財布から慎重に数えておつりが出てきた。いくらが手元に入るものか…。この小遣い稼ぎを済ませたら、さっさと麓の村に帰るらしい。そこにいた４人の女の子達は、飴を上げても撮らせてくれなかった。ダメダメと手を振り、「キャキャッ」と、石垣の掘立小屋に消え失せた。残念と思う自分と、そうであり続けてほしい自分がいる。

夕暮色になった空に赤い小旗が翻る。その木の下付近がハパクンドで、もうテントが設営されていた。ＴＳ端にトイレ小屋があり、便器とチョロチョロホースが引かれていた。「ベルクハイム並みよ！」で通じるのが、今回のＰＷ。

ホテルコックの経験もあるというスタッフ達はとても料理上手。スープも、ヌードルもおいしくて、ロッジ以上。ただ今回は、不覚にもお腹までリラックスしてしまい、あまり手が伸びなかった。シッキムから３カ月内で高山病の心配なし（順化は３カ月有効とか）と思えば、今度は下痢…こんな煩いなしで、楽しめるものならいいのに…。（＊さらに、メルヘンの草原で高度順応をしたことになる）

トイレに行っている間に茜色が消えて、薄闇が広がる。と、「ンガ～、ンガンガンガンガ」の咆哮。向かいからも「ンガ～、ンガンガンガ」、あっちからこっちから谷間中が咆哮で埋まった。ロバがこんなに咆えるとは知らなかった。ロバと分かっているからいいものの、姿が見えなかったらおじけづくほどの迫力。首を伸ばし腹を震わせ、全身共鳴させて咆える。知らないことっていっぱいあるんだ…。



◆８月１０日　*→タカファリＢＣ*

モーニングティーと洗面用お湯が配られる。空は青い。谷間のテントサイトは日陰になるが、出立の頃には日が当たり始めた。前方のダム状のモレーンの上がもう大氷河で、右をトラバース気味に登るという。谷間の樹林を抜けるとすぐ広い牧草地となり、そこからの斜面も、時折樹木があるものの、なだらかな斜面の牧草地だった。一般の人はネパールだ、カラコルムだというと、どんな崖っ淵を歩くのかと思ってしまうようだが、実際は、牛、馬、ロバが荷役して往来する道を歩いているにすぎない。その道の標高が高いだけで、７０００、８０００ｍの巨峰が見える所が、トレッキングの対象地となっている。日本の山より、荷物を持ってもらえるからかえって楽という人も多い。とてつもない巨峰が、見える、見たい、撮りたい…が、辺境のトレッキングである。

74歳のＹさんはＪＩＣＡ海外体験も豊富で元気だが、さすがに登りは止まりがちになる。慣れたガイドのベイグさんは決して叱咤激励しないが、後ろで手持ち無沙汰気味の私達に、「左端に行けば、氷河が見えますよ」と言った。ホント？とばかり左岸へ駆け上がると…ウッソー！！の景観。うねうねと流れるまばゆい氷の大河が白銀の大屏風から流れ落ちていた。「スゴイ！」以上の声にならなくて、上村さんには只

只、指さすだけ。上村さん、礼子さんからも次々歓声が上がった。当然の景観のように、長岡さんはカメラを広げていた。「ウヒャ～」以上にならないまま、シャッターを切る。これが氷河…ギシッ、ギシッの音も聞こえはしないが、うねり、裂け、はじけ上がったままの塊から、冷風が吹き上がってくる。せいぜい標高3200m。それでこんな大氷河を見られるのがカラコルム！

ざらざらのモレーン壁をしばし歩いてみた後は、よそ見しても安全な登山道に戻る。陽光を浴びるこの壁は、紅色のムカゴトラノオや紫のフウロ、サクラソウやツメクサ類のお花畑になっていた。わずかの距離で広がっていく視界…右端にラカポシ本峰（7788m）が出てきて、左端にはディラン（7273m）が端正な逆さ扇を広げ、ついに大ミナピン氷河がその全貌をさらけだした。

登りつめて大休止。背後のバツーラ山群の方もニョキニョキと大岩壁を広げている。青、緑、白の世界に浸りきって至福の時間が流れる。何といったってここまで来なければこの景色は見られない。ロバ達はここで荷解きされて、食事タイムになっていた。ここからしばらく歩幅分だけの崖になっていて、荷を担いだままでは家畜は通過できないのだった。究極、人間様がどこでも通用するポーターなのだ。彼らは２往復してここを通過し、その先、モレーンの陰に、真っ平らなタカファリＢＣがあった。蛇行して水路が流れ、トイレ棟が建ち、空荷で通過した家畜達がのんびり草を食んでいる。

テントからはモレーンが長屏風となって、かの大景観も上しか見えない。ほんの一登りで、モレーン上。これでもかとばかりにズームを変え、レンズを交換し、偏光フィルターもつけて写真を撮りまくった。雲が湧いた、影が変わったとさらに撮った。ディランからラカポシにつながる大稜線に数々の魅惑的ピークが見えるが、名前はついておらず、誰も縦走はしていないという。しかるに、氷河の対岸の5400m峰はプラス５日で、トレッキングの範疇で、ピークハントできるとのことだった。いえ、もう眺めるだけでいいです。

タカファリの平原をさかのぼっていくと、雪渓からの末端は湿地状になっており、ウルップ草に似た花が繁茂していた。

ＯＢ定番のお茶を点て、証拠写真を撮り、もてあます時間をロバと戯れる人、キッチンを観察する人。十分に時間をかけて作られた夕食はまたまた豪華献立。トマト、キュウリ、紫オニオン、ニンジンがきれいに飾り盛りされて、シッキムの時とは比べ物にならない。次々出てくる料理の皿は、山中の料理と思えないほど。味も、繊細で押しつけがましくなかった。しかし、しかし…なのであった。美麗なパキスタン青年がピッタリ給仕についてくれているというのに、食は進まない。申し訳ないほどに食事は余り、下げられていった。あれはポーター達が食べてくれるのだろうか？

そういえば夕食前にちょっとした騒動があった。ポーター達が、久しぶりに羊を食べたいと要求したらしく、ベイグさんは「高い」と即、却下したらしい。目の前の羊？目を丸くしていると、彼らはそんなことはお手の物で、さっと首を刎ね、皮を剥ぎ、さばいてしまうとのことだった。隈無く牧草地となったこのあたりに有害獣は見当たらない。一番の敵は、＜うまそう！＞と思う人間なのかもしれない。勝手に遊び勝手に帰っていく家畜達だが、現実にはどんなルールが敷かれているものか、一介の旅人には

感知できない。

見上げるモレーンにいつも留まっているロバがいた。案の定、夕暮時に「ンガー、ンガンガンガ」が始まった。別のが啼くというより、エコーが戻ってきた。シルエットで浮かぶそれは、首を伸ばし、腹を波打たせてラッパになりきっていた。

◆８月１１日　*→ミナピン→ギルギット*

朝焼けのラカポシを撮る。朝食前に背後の尾根へお散歩。ずいぶん高く見えたが、ベイグさんの言う通り、３０分で到着した。標高を上げた分、ミナピン氷河がさらに奥行を増し、ラカポシの別の氷河が見え、テントサイトが見下ろせた。尾根上にも家畜達の跡があったが、さすがに踏まれていない急斜面の方は高山植物が豊かだった。ここ（3650m）が今回トレッキングの最高地点で、あとはひたすら日本への帰路になる。長岡さんは、デジカメ、モノクロ、大判カメラをも総動員しており、「先に行って」と、とことん撮影を決めたようだった。

あまりに姿が見えなくてベイグさんは気掛かりそうだったが、妻は「毎度団体行動のとれない人ですから、お構いなく」と言い、上村さんは「学生時代からそういう奴でしたから」とアハハ…になった。そんな気楽だった現役時代から３０年も過ぎて、今、カラコルム山中でこうして遊んでいるなんて、信じられない…。

（間延びする帰途は省略。８月15日帰国）

◆エピローグ

高度障害の心配もなく楽しめた氷河ウォッチング。こんなお誘いをもらわなかったら、生涯ご縁のなかった大パノラマだった。

「せっかくの休日を、私達のカラコルムデビューのために、*「再訪」*に潰してもらって…」恐縮する私達に「私も、初めてだったんですけど」と長岡さん。なんと、見てきたようなコース説明から、「ここからは氷河が見えてきまして…」の詳細なガイドの数々はすべて、読図と予習の賜物だった。もちろんカラコルムハイウェイは７度目（５年前のバルトロ氷河トレッキングなど）。そのために「前に来た時は…」発言が随所に混じった事による誤解もある。しかし、「既存の２つのトレッキングコースの、よいとこ取りをして企画した」今回は、楽なこともあって、いつか家族と一緒の時にと除けて温めておいたコースであったらしい。

何時間もじっと地図を眺め、資料も集めて予想をたて、現地へ行って実際の景観を楽しむ…その精進の結果の、あまりに滑らかな解説。そのため、あとの全員が最終日まで「ご当人には犠牲的な（かつ、きっと家族に対しては積年の我儘お詫びも兼ねた）再訪」だと思い込んでしまっていた。さすが、元国土地理院地図部長のケタ外れの実力！

（＊この箇所には「持ち上げすぎでは」の指摘がありました…）

さて、こうして旅行記を打って、必然で資料を確認していくと、「既存の２コース」というのが、アルパインツアーカタログのカラコルム定番コースであったこと、個人手配なら考えられなくもないドッキングであったことが、「コロンブスの卵」的に分かります。同時に、その周辺ページのガイドが、容易に解読できるようになっていることにも気付きました。それこそが「カラコルム*入門*コース」の意味でありました。

あらまほしき先達の長岡先輩からは、「見てきたような解説」までできる可能性を、こんな30年後にも学ばせていただきました…が、そんな能力もなく、興味もなく、そのくせ先入観・雑念・妄想まみれの凡人の場合、「百聞一見にしかず」こそが、凌駕できる（？）裏技です！自分の五感を震わせてくることです。そうすれば、あるのかな？の第六感、第七感もきっと共鳴してくることでしょう…あのロバみたいに。

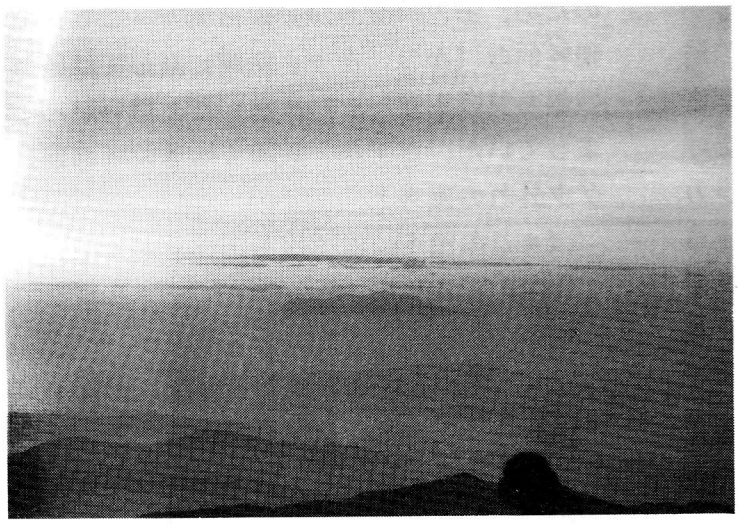
２～３年後、また、こんな楽で、お得（＝２回分のいいとこ取りのような→半額で済む→時間も節約できる）なコースを企画して下さるそうです。もちろん「見てきたような解説」付き。ＫＵＷＶ・ＯＢならではの役得と申せましょう。是非、資金を貯め、そこそこに体力を維持。周囲に十分な根回しを図っておかれるよう、お薦めします。

－完－

やまざと写真館－2

21期　大野直子

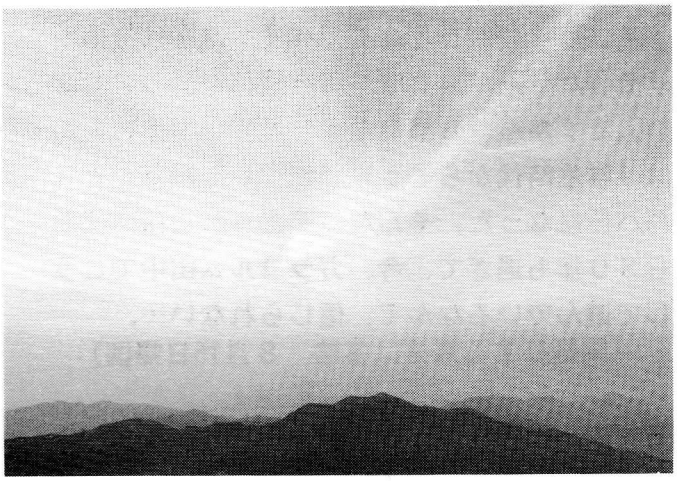
２００５年の夏　白山



御岳遠望

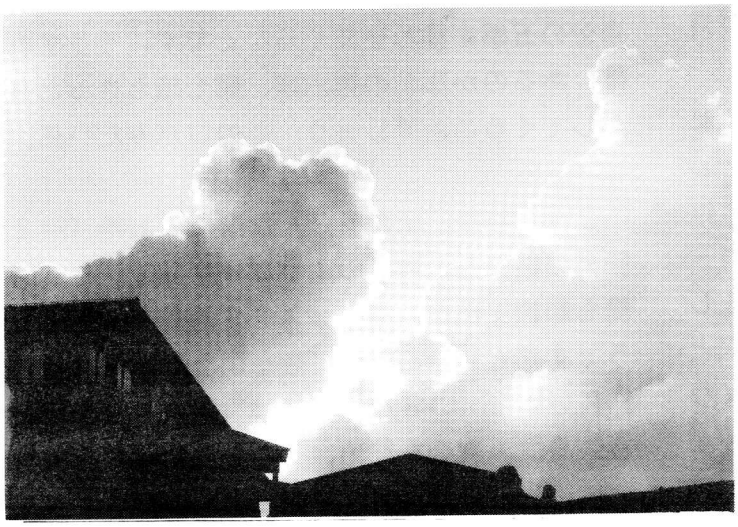
剣峰越しの御来光

別山



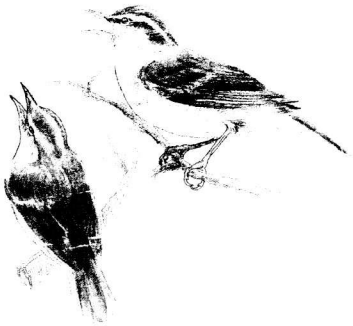
ミヤマキンポゲ

ミヤマリンドウ



室堂（下：イブキトラノオ）

OB会支部だより



いよいよ発足！！　首都圏支部

9期　山中重夫

PW全開 活動満載！！　近畿支部

8期　篠島益夫

●2005年６月５日 とうとう立ち上がる！！

ＫＵＷＶ首都圏支部設立奮戦記

９期　山中　重夫

２５名の参加予定が、当日は急きょ３２名に…。
おぅ、なつかしいなぁ～！！
せんぱ～い、元気でしたか…？！
６月だと言うのに、
会場の銀座ライオンは、盛夏のような熱気がムンムン。
きっと、みんな、首都圏支部の立ち上げを
心ひそかに待ち望んでいたのでしょう。
大・大盛況のうちに設立式が行われました。

「やまざと」よりの要請を受け、首都圏支部の設立経過を少し記したいと思います。
私が関西から東京に転勤になり約１８年が経つがその間、伊藤、保田、鍋島君らの努力で９期の同期会が継続されていた。そこに８期の藤井、柳川両氏１１期の青柳、北川君などが参加していた。昨年はそれに７期の四十万さんが参加され茨城から８期の柴田氏、金沢から穴田氏が参加される等年を重ねるごとに盛況になっていた。

そんな中、私自身世の中の厳しい風を受け２年前早期退職をし、プータロウ生活を楽しんでいたおり、何故か西の方から騒音が聞こえてきた。聞くと８期の篠島氏が関西支部を立上げ活発に活動しているそうな。

日本の中心は東京で全てが東京中心にまわっていると自負していた関西出身の東京人としては看過できない事態である。篠島氏と私は兄弟会社に勤めていたこともありますます何とかせねばと思いが募り、同じく無職を楽しんでいる藤井氏、同期で自営業に転職した清水君、１１期の青柳君の協力を得て２月から準備に取り掛かる。

先ずは名簿作りからそこで奥名君にお願いし、全ＫＵＷＶＯＢ会の名簿を取り寄せ、首都圏版を作成する。会場を予約するにしても大体の参加者数が必要なのでメールのある人に対し参加の意志を確認、約２０名弱の参加の返事があり、２５名で新宿銀座ライオンを予約する。

名簿を整理していて興味深かったのは（１）クラブ内結婚とおぼしき人が結構いること。（２）都内２３区に住んでいる人が殆どいない。無論田園調布、成城などは０（３）住所不明で随分返ってきたが、名簿を見ると企業の合併等で勤務先の名前が既に実在しないものも多く、社会の荒波がＫＵＷＶにも押し寄せていることを実感したこと等である。

最終参加者を決めるべくメール送信での未回答者とメールの無い人に対し往復葉書を出し締切日には２５名であったものが、続々追加になり最終的には３２名になった。
お陰で会場は狭い上に、参加者の熱気が加わり６月と言うのに盛夏並みの暑さであった。

席上、（１）毎年６月第一土曜日を総会とすること（２）秋に懇親山行を開き今年は１０月２２日（土）高尾山を計画することを決め記念撮影をし再会を約束し散会した。

今後の課題としては、４５年の世代間をどう纏めるか。次回は首都圏でなく関東支部とし関東各県の会員に広く呼びかけていく等であるが、是非とも沢山の企画立案者が現れ、会を盛り上げて頂く様に期待したい。

また末筆ながら総会を終えた、翌日から多くの方から感謝のメールを頂き世話役として大変嬉しかったことを報告し筆を置きます。

●kuwvOB会首都圏支部　第1回山行記録

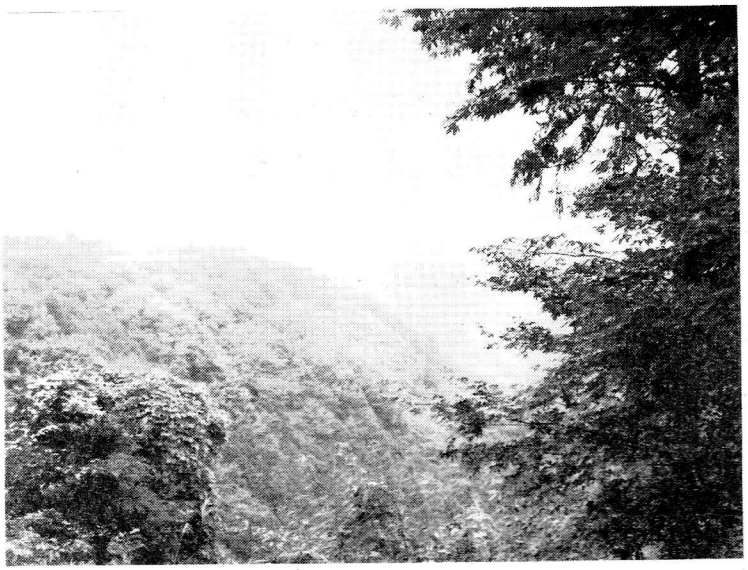
首都圏の人気スポット高尾山へ

18期　横井恒雄

山中さんがみりん干を焼いてくれた…

青柳さんがビールを回してくれた…

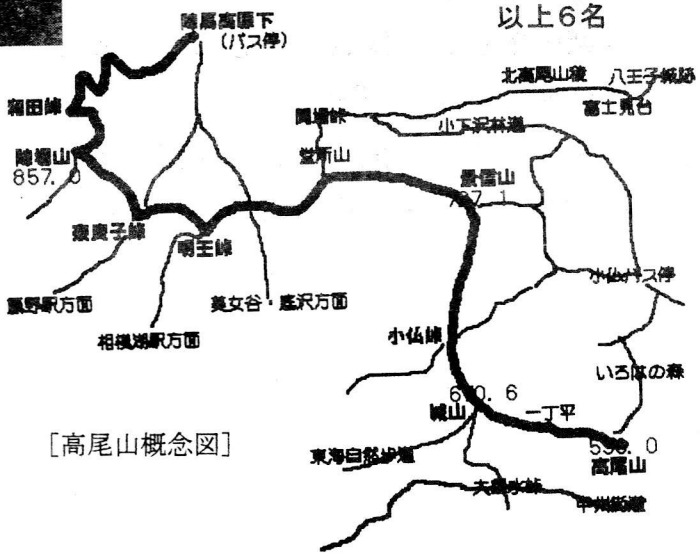
合津さんが紅茶を沸かしてくれた…



日時　：　10月22日(土)　10時
京王高尾山口集合

参加者　：　6期・合津　尚
8期・藤井信晴
9期・山中重夫
11期・青柳健二
14期・清家雅幸
18期・横井恒雄(記録)
以上6名

コース　：京王線高尾山口ー(稲荷山コース)ー高尾山(599m)ー城山(670.6m)ー小仏峠ー景信山(727.1m)ー登山口ー小仏バス停((5時間)



[高尾山概念図]

１０月２２日（土曜）10時　京王線高尾山口集合。高尾駅は結構な人だかりである。

高尾山は明治百年の記念事業として「明治の森高尾国定公園」に指定された高尾と大阪の箕面を結ぶ全長約１３００キロの東海自然歩道の最終区間に当たり、東京都心から１時間程度で気軽に行けることで登山人口世界一を誇る人気スポットらしい。(高尾山に来るのが初めてなので)

６月５日に首都圏支部立ち上げ総会？で新宿の「銀座ライオン」で集まって以来４カ月。ＫＵＷＶの先輩とは言え、そこで初めて会ったメンバーが殆どで心配だったが、９期の山中さんが目印としてピ

ンクの東京山岳会のジャンパーを着て立っておられたおかげで捜す苦労もなく集合できた。

名前と顔が一致しないので（小生だけかも知れないが）自己紹介をして山歩きを始めることとなった。

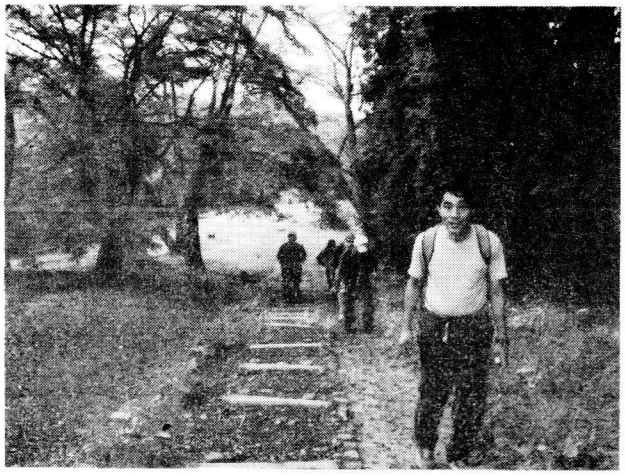
参加者は前日のメールでは5名だったが、当日合津さんが参加で6名となった。総会には６月の総会には３０名位が参加し、結構盛り上がっていた。もっと沢山の人が参加するものと勝手に思い込んでいたが、小人数の山行となった。小生も勤めている会社ではもう結構おじさんの部類だが、今日のメンバーの中では１番の若輩者である。「第１回だから、次ぎはもう少し集まるといいね」「集まったメンバーは６０代前半から５０代前半までのそれほど高齢でもなく、それほど若くもないメンバーか、４０代がいるといいね。」等、あれこれ話しながら、ケーブルカーの駅の横を過ぎ、登山口に。

樹間のよく整備されたハイキングコースを登っていく。途中「見晴らし台」ピッチ休憩。所沢方面が見えるはずであるが、曇っているため何も見えない。今日の天気は、天気予報では晴れてくるはずであるが、朝、家を出たときは雨。高尾山口に着いたら雨は止んでいたが晴れる気配はなく、結局、一日中晴れなかった。

１時間程度で高尾山頂上に着く。頂上と言っても、どこが頂上か分からない広場のようなところ。茶店やら飲食店が軒を連ねており、紅葉のシーズンには１月程度早いようであるが、今日も大変な人だかり。山中さんによると５月の連休は頂上のエリアに入ることができないほどの混雑であるらしい。

城山方面に下った所で昼食をとる。山中さんがコンロを取り出し、みりん干を焼いて振舞ってくれたり、青柳さんがビールを回してくれたり、合津さんが紅茶を沸かしてくれたり、昼食をもりあげていただいた。

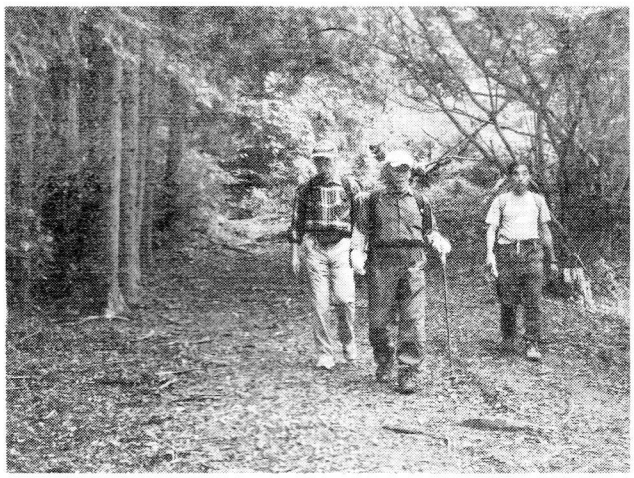
出身地の話をすると首都圏支部であるが、東京出身者が誰もいないとか、藤井さんは百名山を後１つ残しているとか、合津さんはマラソン大会によく出られ、１月２５０ｋｍは走るとか、あれこれ自己紹介がてらの話をする。



昼食後、景信山（カゲノブ）を目ざして奥高尾縦走路を行く。高尾山頂上近辺の人だかりからすると大分静かであり、天気は一向に回復しないが、少しガスって山歩きをしている気分にはなる。晴れていれば富士山等が見えるそうだか、景色は見えない。

登山道は大変に整備が行き届いており、所々に昼食するベンチがあるし、観光地として整備されている。時折、前方からランニング登山大会の参加者が小走りでやって来る。道は狭いところもあるが、概して広く、走ることができる。インターネットで見ると、よくマラソン登山大会も行われるところらしい。城山から子仏峠まで下り、１００ｍ位のちょっとした登りをして景信山に着く。ここにも大きな茶店があり、やたら茶店があるが、メンバーの誰も茶店で物を買ったりしない。近辺で休んだ後、登山口まで下る。３０分程度で登山口。バス時間に間に合わないかも知れないので、最後はバス停まで走りました。諸先輩方も日頃、鍛錬されており、元気で、大したものです。

バスでＪＲ高尾まで出て、駅近辺の居酒屋で２次会。大学時代の思い出、期が近い人の消息、50周年には金沢に行きたいということや、野沢スキー合宿の話等で盛り上がる。



この山行はハイキングコースだけど、最後はバス停まで走ったし、ワンゲルらしい締めくくりで第１回としてはそんなに楽だったわけじゃない、久し振りに楽しい山歩きだった皆さんの感想。第１回は集合時間を気にしたが、次はもう少し早い集合時間でも構わない、総会（来年６月）までにもう一度行こうという話になりました。山歩きをして、快い疲れで、結構ビールを飲んで散会となりました。

特別寄稿

OB会・近畿支部の歩み

2004・1月発行のやまざとVOL19では2004・1月の近畿支部のうぶ声から、2004・11月までのイベントを誌上でレポートさせて頂きました。
今回は、その後2004・12月から、2005・9月までの活動をイベント中心に報告させて頂きます。

イベント報告

1. 生駒山PWと忘年会　(2004・12)　企画　12期　赤地賢一
2. 六甲ゴールデンコースPW　(2005・1)　企画　15期　高村千佳子
3. 六甲縦走路・須磨アルプスPW　(2005・2)　企画　12期　野村益巳
4. 黒田庄町・白山PW　(2005・3)　企画　11期　加藤忠好
5. 花の霊山山PW　(2005・4)　企画　8期　伊豫欣二
6. 残雪と花の大山PW　(2005・5)　企画　8期　篠島益夫
7. 北摂・剣尾山(784m)PW　(2005・6)　企画　10期　藤井直樹
8. 伊吹山PW　(2005・7)　企画　15期　宇野潔

✓ 8月は、イベントお休み

9. 秋刀魚パーティと須磨アルプスハイク　(2005・9)　企画　11期　加藤忠好

✓ 10月は、奈良県曽爾高原と倶留尊山PWを10月22日予定

2005年の新しい活動傾向

- 活動エリアが滋賀県、鳥取県など周辺エリアに拡大してきた。
  霊仙山(滋賀県4月)、大山(鳥取県5月)、伊吹山(滋賀県7月)
- 宿泊を伴う一泊以上のイベントが増えた。
  霊仙山(1泊・4月)、大山(2泊・5月)、伊吹山(1泊・7月)
  秋刀魚パーティと須磨アルプスハイク(1泊・9月)
- 金沢、名古屋、東海地区の会員の参加が目立ってきた。
  近畿、首都圏に続く東海支部の発足の芽になれば・・・
- OB会イベント以外にメンバーが個人で企画する山行きに相乗りする会員が増えて会員相互の交流が増えた。
- 山以外の文化遺産、自然遺産に対する企画チームを作る等、広い世代のOBが参加出来るイベントの必要も感じられる。

レポーター　近畿支部世話役
8期　篠島益夫

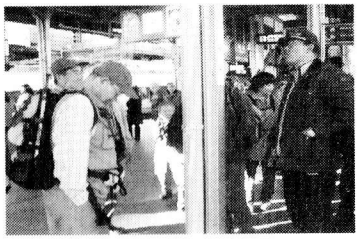
※90度回転してご覧ください。

KUWV－近畿OB会

1. 生駒山PWと忘年会

日時:04・12・12　ところ:生駒山＋日本橋香港楼
集合:　近鉄奈良線枚岡駅・AM9:30
企画担当:　12期赤地、14期喜久子夫妻
参加者:
5期金岩、6期小川、8期篠島・節子、10期藤井、島林、
11期加藤・智美、畔山、野村、12期赤地、14期楠屋、赤地喜久子、
15期宇野、間所・夫人、金井、高村、川端　総勢19名

今年1月のイベント開始以来の最大参加者を得て、大阪の山では初めてのPW、山はよく整備されたハイキングコースで天候にも恵まれ快適に終了、音の花温泉で汗流しのあと日本橋に向かい、大忘年会に入る。
報告者が帰宅したのはPM11時。



1

枚岡神社－頂上・出発9:40－到着11:25

枚岡神社

展望台10:10着

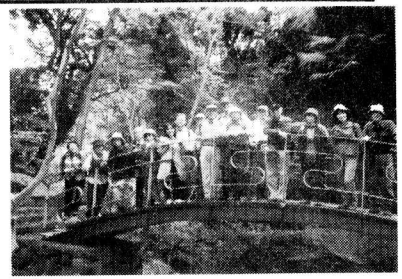
頂上・大阪背景

頂上・金剛背景

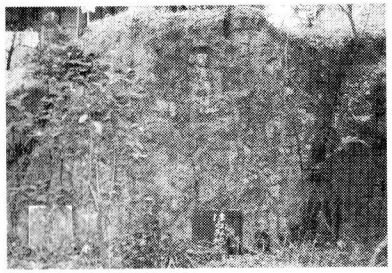
2

頂上－音の花温泉・出発12:30－到着14:10

鳴川峠



鳴川の紅葉谷



紅葉谷の石仏

音の花温泉

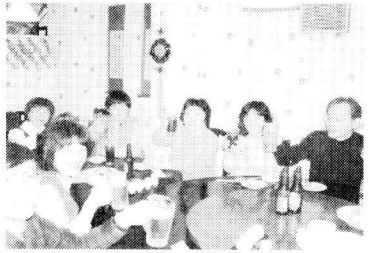
3

忘年会・日本橋香港楼

盛りだくさんの酒と中華メニュー、赤地企画の中国服で皆さん完全に日頃を忘れて歓談

4

忘年会・日本橋香港楼＋カラオケ



香港楼

香港楼

オンパレード

カラオケヤ

5

雨ヶ峠

本庄橋跡

一軒茶屋

有馬温泉下山口

7

2005・01・29 KUWV－OB近畿
2. 六甲山ゴールデンコースPW 報告・8期・篠島

参加者　:5期金岩、6期小川、8期伊豫、篠島・節子、10期島林、
　　11期加藤・智美、15期高村
集合:阪急芦屋川駅(AM9:30)解散:有馬温泉銀の湯(PM17:15)
コース:　芦屋川駅(9:40)－高座の滝－ロックガーデン－風吹岩－
芦屋カントリー－水場－雨ヶ峠－本庄橋(昼食)－一軒茶屋－魚屋道－
有馬温泉(15:30)

芦屋・ミーテング

高座の滝

風吹岩

6

有馬温泉・銀の湯

有馬温泉・金の湯

銀の湯で汗流し、解散。
それぞれ家路に着く為、バスセンター、神鉄駅に向う、途中の金泉では温泉水の試飲、塩辛さと金け臭さで飲めたものではない。山の行程は6時間、歩行時間では4時間45分ほどで標準コースタイムのうちでKUWV-OBも健在といえる。準備したアイゼンも使うところは少なく、銀泉も待ち時間なしでOK、今年のKUWVも初回から順調な滑り出しであった。

8

3. 六甲縦走路・須磨アルプスPW

2005・02・26 KUWV－OB近畿支部

参加者:　5期金岩、8期篠島・節子、10期藤井、11期加藤・智美、12期野村、15期高村
企画担当:　12期野村　集合:　9:30山電須磨浦公園駅
コース・時刻:　9:35須磨浦公園－10:15鉢伏山上－10:30出発－10:35旗振山上－10:45鉄拐山上－11:00おらが山上－11:10出発－12:15横尾山上・昼食－13:00出発－15:15高取山上－15:25出発－15:55華の湯－18:15華の湯にて解散

好天は須磨浦公園から高倉台まで続いたがその後は快晴あり、吹雪あり、曇天ありで変化の早い天候で冬らしい一日であった、コースも高倉台、妙法寺など市街地と山を登り降りするコースで訓練登山の感じでもあるが、南北にわたる眺望とアルプスの雰囲気を味わい、華の湯で汗流しと歓談を楽しんだ一日でした　8期　篠島　益夫

9

縦走路・須磨浦公園－高倉台

須磨浦公園登山口

鉢伏山上

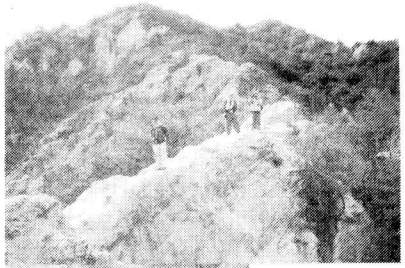
鉄拐山上

高倉台

10

高倉台－栂尾－横尾－須磨アルプス

栂尾山上


須磨アルプス

雪の横尾山上

須磨アルプス

11

須磨アルプス－東山－板宿分岐

須磨アルプス

須磨アルプス

雪の東山頂上

須磨アルプス

12

板宿分岐ー高取山ー華の湯

縦走路板宿分岐

高取山上神社

高取山荒熊神社

華の湯・歓談

13

390mピーク(昼食)ー門柳分岐ー白山頂上

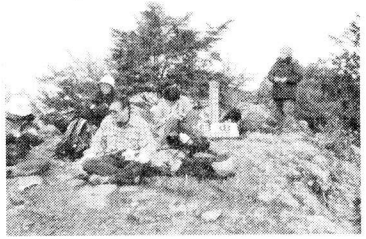
390ピーク手前

11:55ー12:35

尾根筋の道標

門柳分岐

13:15



白山頂上

13:30ー14:15

15

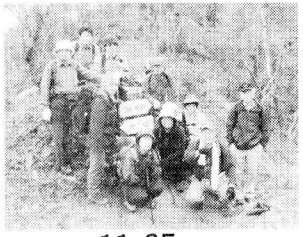
KUWVーOB 2005／03／12

4. 黒田庄町・白山PW

日時:2005・03・12　　場所:兵庫県黒田庄町・白山
参加者:6期小川、8期篠島・節子、10期藤井、11期加藤・智美、12期赤地、野村、14期楠屋、15期高村、43期加藤菜就　　合計11名
今回は若手の43期加藤菜就さんが初参加して頂き、最も目を引く存在となった、11期加藤さんの長男、親子2代のKUWVーOBであり、金沢でのイベントの折は送迎でお世話になった人も多いが、今年の院卒後は関西に就職され、これからの近畿支部での活動に年配OBが期待をかけています、今回は企画担当の動員努力が実り2桁人数でのイベントとなった

10:55

11:10



11:35

14

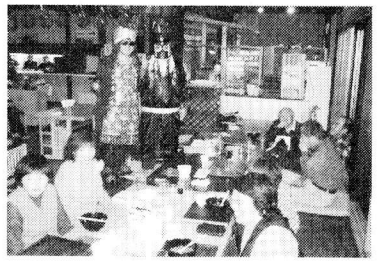
門柳下山ーぬくもりの郷

門柳下山口

14:50

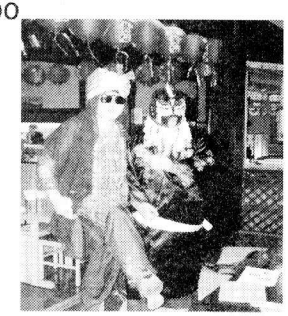
白山バックに門柳

15:00



ぬくもりの郷

17:50



赤地・加藤おひろめ

18:00

16

5. 花の霊仙山PW

KUWV－OB近畿2005・04・02

集合：4月2日（土曜日） AM7：45 名神黒丸PA
参加者：北摂組（伊豫車） 5期金岩、8期伊豫、10期伊豫敎子
13名 阪神組（小川車） 6期小川、10期藤井、12期野村
神戸組（宇野車） 15期宇野、高村、舟田（ゲスト・金沢）
神戸組（篠島車） 8期篠島・節子、11期加藤・智美
天候： うす曇

オプション長浜の出会い（宇野家旧宅・2日19：00－3日9：00）
参加者：宇野、高村、舟田、加藤・智美、篠島・節子
10名 15期祖父江（弥富）、佐野（岡崎）、23期石地（長浜）

オプション長浜の旅（3日9：00－13：30）
参加者：宇野、高村、舟田、加藤・智美、篠島・節子 7名

17

4月1日（金）

せっちゃん来たる一金沢を昼頃たち、午後3時半には須磨に現る

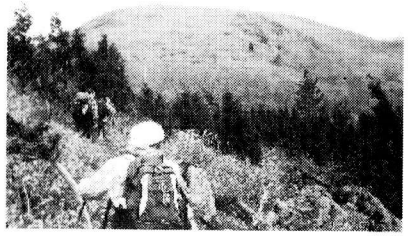
名谷駅から近隣の五色塚古墳と六甲縦走路の高倉台おらが山展望台へ、5時半ころには11期加藤夫妻、15期高村さんが待つ篠島宅に到着、歓迎の「瀬戸内の春の宴」開始

18

4月2日（土） 登山口－笹峠－近江展望台（南霊仙山）・1

今畑登山口

尾根手前



南霊山を眺めて

尾根筋からの御池岳

19

登山口－笹峠－近江展望台（南霊仙山）・2

笹峠で一服

急登の途中で

みすみそうが多い

藤原・御池岳を背に

笹峠で

急登を経て南霊山手前

20

近江展望台ー稜線ー昼食ー最高峰・1

近江展望台

カルストの稜線を行く

稜線は福寿草と残雪の花園

福寿草

福寿草とせっちゃん

歩きにくい石灰岩の稜線

21

近江展望台ー稜線ー昼食ー最高峰・2

福寿草の道

残雪と福寿草

石灰岩と福寿草

広いカルストの稜線

22

近江展望台ー稜線ー昼食ー最高峰・3

昼食後

昼食準備・温かいスープ

雪の尾根で

霊仙山最高点1094m

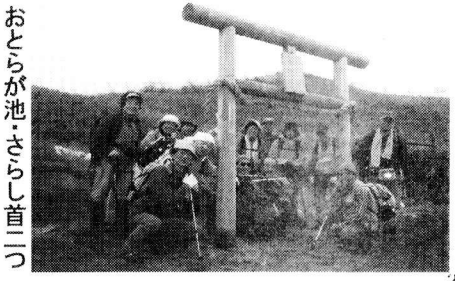
23

最高峰ー頂上ー下山コースー極楽湯・1

最高点から頂上へ

頂上にて

雪の谷筋を下山



おとらが池・さらし首二つ

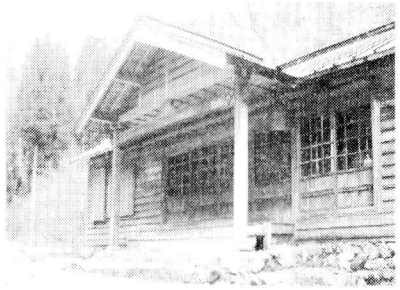
24

最高峰ー頂上ー下山コースー極楽湯・2

急降下が続く

汗拭き峠

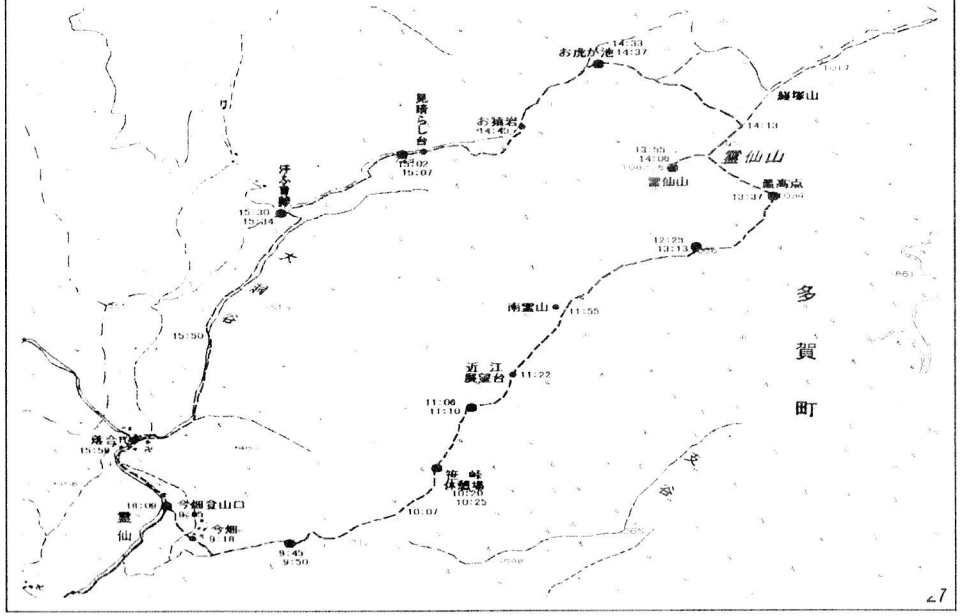
4合目



落合廃村の廃寺

25

山地図・行動記録（11期加藤作成）



27

最高峰ー頂上ー下山コースー極楽湯・3

汗拭き峠で

落合廃村・きくざきいちげ

今畑登山口に戻る

彦根・極楽湯・祖父江、佐野合流

26

花の霊仙山PWオプション・長浜の出会い（4月2日）

祖父江・佐野・石地さん交えて

宇野家旧宅・せっちゃん

宇野家旧宅・高村さん

宇野家旧宅・乾杯

28

花の霊仙山PWオプション・長浜の出会い（4月3日）

長浜の出会い参加者
15期宇野、高村、セッツちゃん、祖父江
佐野、23期石地、11期加藤・智美、8期篠島・節子　10名

宇野家旧宅最後のお客様となり、家と宇野さんにとっての祈念すべき日となった様子でした

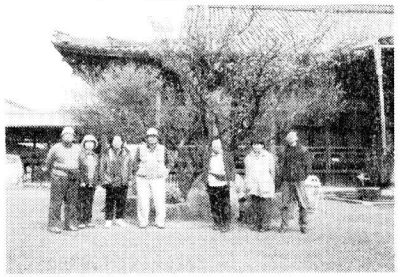
朝のご飯だ合唱

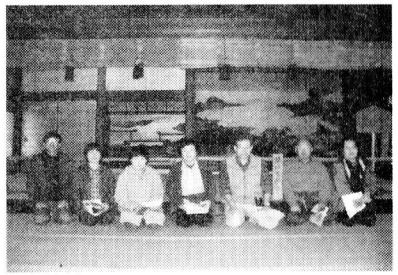
宇野家旧宅にて

宇野家旧宅にて

29

花の霊仙山PWオプション・長浜の旅（4月3日）


長浜・大通寺


大通寺書院

のっぺいうどん

味わう・のっぺいうどん

30

6. 残雪と花の大山PW

KUWV－OB近畿
05・04・29－05・01

参加者：
6期小川、8期篠島・節子、10期藤井、白石淑子、11期矢崎、加藤智美、15期宇野、高村千佳子　合計9名
（加藤、白石さんは1泊2日コース、他は2泊3日コース）
大山まで：
白石さんは29日昼に、矢崎さんは29日夕方に大山吉野旅館で合流、他のメンバーは阪神組、神戸組の車2台に分乗、中国道安富PAで9：00には集合、米子道蒜山ICから大山スカイラインで鬼女台－鏡ヶ成－鍵掛峠－桝水高原をへて、29日昼前には吉野旅館に到着、それぞれ昼食を摂ってから、白石さんを含む8人でウオーキングに出発
29日ウオーキングコース：
吉野旅館－金門－大神山神社－元谷堰堤－大山寺－阿弥陀堂－大山観光センター－吉野旅館

31

29日：大山寺ウオーキング－1

鬼女台からの大山・烏ヶ山

鍵掛峠からの大山南壁

大神山神社

元谷堰堤・夏山道分岐

32

29日：大山寺ウオーキング－2

鬼女台・大山と烏ヶ山を背に

吉野旅館・全員集合

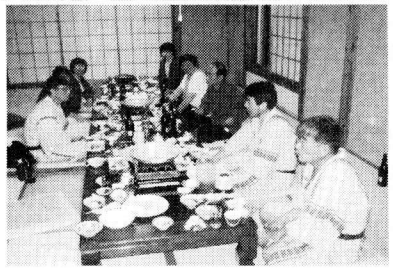
大山寺・阿弥陀堂

大山寺・本堂

33

29日：吉野旅館・懇親会

鴨鍋をメインに山菜てんぷら等、時節柄山菜を主役に懇親会を始める。松江より十期の白石淑子さんが参加、松江でのアルペンクラブ立上げ等、ワンゲルOBに相応しい地域活動に感激する、深夜までワイガヤが続く。



34

30日：大山登山－1

コース：大山寺－宝珠尾根－ユートピア－三鈷峰－象ヶ鼻－振り子ヶ山－親指ピーク－野田ヶ山－大休小屋

中宝珠越え手前

中宝珠付近から天狗ヶ峰・剣ヶ峰

尾根の大山ひょうたんぼく

上宝珠越え

35

30日：大山登山－2

ユートピア・象ヶ鼻を背に

三鈷峰頂上・主峰を背に

三鈷頂上より天狗ヶ峰・剣ヶ峰を望む

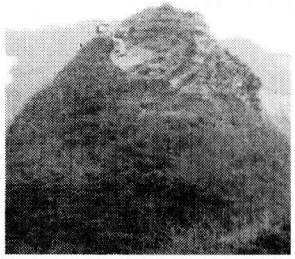
三鈷頂上直下のピークで各人のポートレートを撮る

36

30日：大山登山－3（難コース）

象ケ鼻－振り子ケ山で大山東壁を背に

ものすごいブッシュを抜けて振り子ケ山頂上へ・東壁の迫力が一望に



残雪と痩せ尾根が続き、親指ピークに至る、岩登りとロープでのピーク下山は慎重に

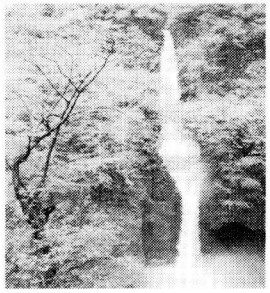
やっと野田ケ山頂上・皆さんかなりの消耗
この先も残雪で尾根の広い場所はルート探しに手間を要す

30日－1日：大山登山－4

大休小屋
夕食・朝食とも餅がらみ・楽でも腹持ちが良い、よく食べて頂きホットした、持参のメニューも多く食べきれません

大休小屋

三日目は遂に大休小屋を出るときから雨・川床到着



雨に煙る大山滝・雪解けで水量が多く、今日は男性的に見える滝への途中道でセンナ（わさび菜）にありつくき、汗流し後、少しずつ持ち帰る

1日：大山周遊ドライブ・ウオーク

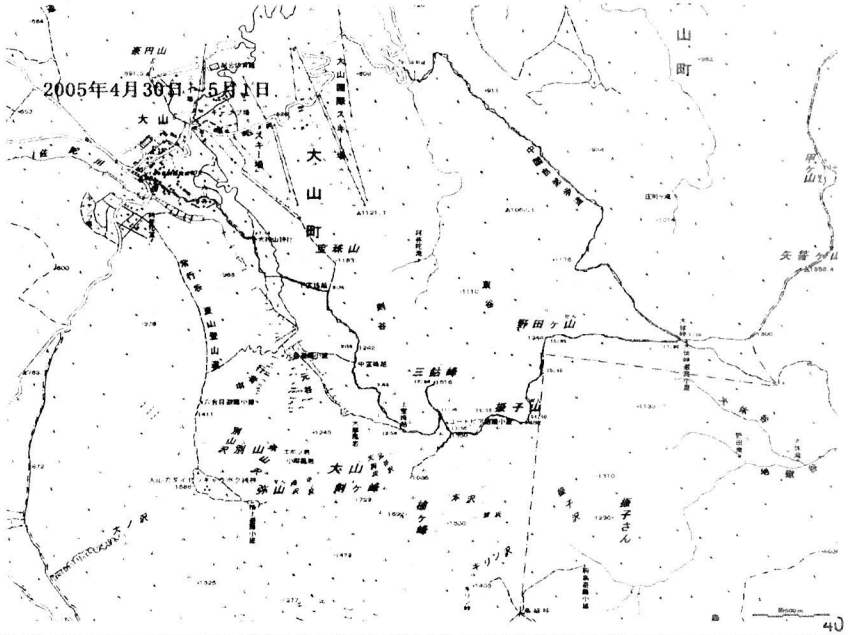
コース：大休小屋－川床－香取展望台－船上山遺跡－野井倉－－向ケ平－大山滝－－向ケ平－鏡ケ成－蒜山IC

30日と一日で大山周遊道路も360度、ドライブしたことになる、最後の1日は雨の為、船上山ウオークは中止したが、雨に冴える大山滝はウオーク出来た、汗流しは鏡ケ成の国民宿舎でゆっくり、そして帰途についた。
大山を知る人は地元の白石さんと中四国が仕事場だった私くらいだったが、皆さんが大山がその高度からは想像出来ない迫力と豊かさを見つけてくれたと思う

大山貫すみれ

しょうじょうばかま

大山登山コースタイム・マップ



7．北摂・剣尾山(784m)PW

KUWV－OB近畿・企画藤井直樹（10期）・実施０５０６１８

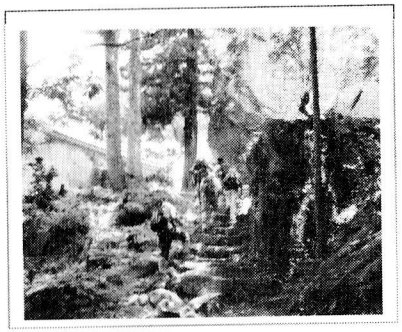
参加者:

５期金岩、６期小川、８期篠島・節子、10期藤井、11期加藤・智美、12期野村、15期高村、間所　　計10名

コース：

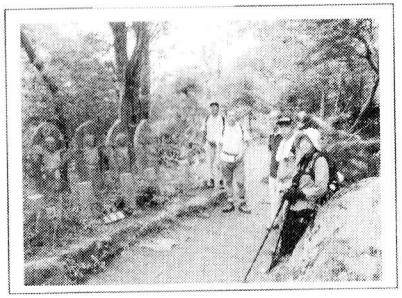
簡保能勢の郷―登山口―行者山―六地蔵―月峯寺跡―剣尾山頂上（往復）

登山口



磨崖仏付近

炭焼釜跡

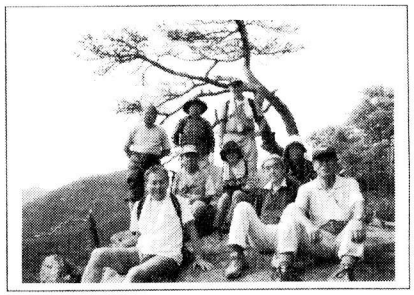


六地蔵

剣尾山頂上

グルメな昼食

最近の山行イベントは、
グルメになって、山から帰ったら
体重の増える人もあるとか、
健康志向に戻ろう！

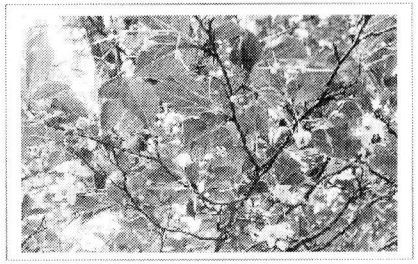


行者山の岩場

簡保の湯・汗流

今回は時節柄、最悪は雨でも実施出来るコースを企画の藤井さんが決めてくれた、これからはやった事のない奈良、和歌山にも足を伸ばせたら、新しい体験が出来そう、報告は篠島

左・えごの木　右・うつぎ



8．伊吹山ＰＷ　2005･7･30-31

企画:　15 期　宇野潔
報告:　8 期　篠島益夫

KUWV-OB 近畿

参加者：

6 期小川、8 期篠島夫妻、10 期藤井、12 期野村、15 期宇野、祖父江、佐野、16 期川端、23 期石地父娘（菜月ちゃん）合計 11 名

スケジュール：(30 日)

13:00 伊吹山登山口集合、14:00 車で 3 合目キャンプ地

16:00 食当開始、17:00 夕食･宴会開始、20:00 ﾃﾝﾄ消灯

スケジュール：(31 日)

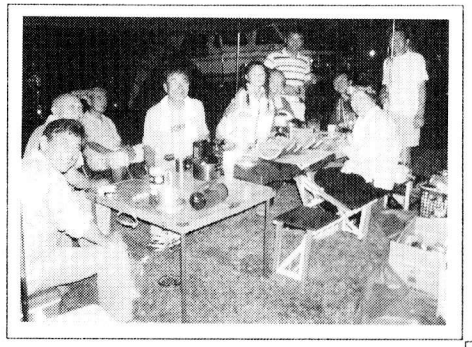
2:00 起床･軽食、2:30 登山開始、4:30 頂上着･ご来光

5:00 日の出･朝食･頂上花巡りコース散策、8:00 下山開始、9:15 3 合目着･懇談･休憩、11:00 昼食･カタズケ、

13:00 車で下山、14:30 彦根で汗流し、15:30 解散

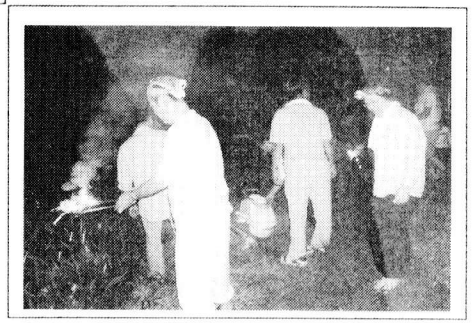
ゆうすげ咲く3号目

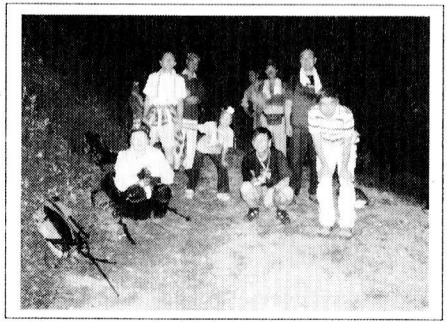
昼から宴会



夕食後、こだわりの大中小でスイカを、幸いにも何故かほぼ均等になり、犠牲者はなかった、誰がこの風習をＯＢ会で広めたか、其の張本人は今回は珍しく欠席でした

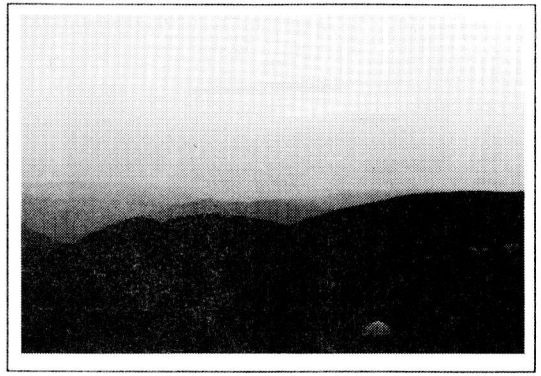
童心に返って花火遊び、メンバーの菜月ちゃんばかりでなく,近くのテントの子供達まで集まって





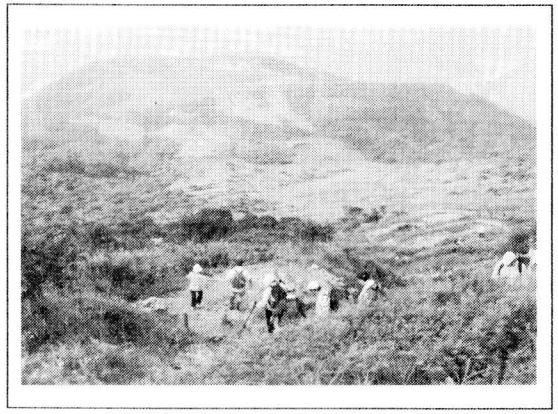
朝 2 時起床、カロリーメイトにカップスープで軽食、直ちに出発、星が見えるが、真っ暗闇、頂上まで続くヘッドランプの列が頼り、
久しぶりのテント泊で近所がうるさく、殆ど眠られなかった人ばかり、
でも元気

2 時間もしないで頂上へ、ガスは殆ど晴れたが、ご来光の方向に雲が少し、しばらく待ったら、雲の上からご来光が、下のキャンプ地やホテルの人も皆,頂上に集まった感じ



頂上でのご来光、
平原のような広い頂上には人が多い
伊吹は登山コースに樹木が少なく、
日の出後は暑いので夜間登山して
ご来光という人が多いようだ

満開には少し早いが、ピンクの
「しもつけそう」と紫の「るり
とらのお」の群落が目立つ
白の「更科しょうま」はまだつ
ぼみだった
8月の盆前が最盛期の感じ



朝食を済ませ、8 時頃からひ
たすら下山、登り返しや下り
返しがないのがスムーズ、
ただ、石灰岩なので、やや,
滑りやすい、
下りコースからの3合目キャ
ンプ場の眺めは圧巻もの

今回も滋賀県でのイベント実施となり、地元長浜市在住の 23 期　石地さんには準備,その他でまたまたお世話になった、また下山コースで怪我人の介助にあたったが、これも我々のメンバーに医師である 15 期　祖父江さんがいてくれたから、メンバーが揃うと我がKUWV－OB会も真に頼もしい限りだ　　完

金沢ミニ情報

近畿に負けとられんぞいね…

☆8/29　19期有志による《50歳突入を祝う会》　inあまつぼ

夏の過日、富士宮市より来沢した 19 期佐野吏氏を囲んで、「なんのし、ビール！」となったのでした。50 を迎えたというのに相変わらずやんちゃ坊主そのものの早川大善氏。海外旅行に燃える佐倉(溝口)正樹氏。遙か昔、佐野氏の婚前旅行で卯辰山中腹にあるボロい民宿(トレーニングの時見ましたね～)を予約して佐野夫人から今も恨まれている辻泰樹氏。チャンこと石田(和田)千絵さん、女医帯刀(佐々木)圭子さん、サッカー大好き塗谷(荒木)光枝さんらの女性陣などなど、懐かしい顔・顔。最後はやっぱり山の唄を熱唱して締めくくったのでした！

☆12/10　《現役生とOB会役員との懇親会》　in鮨「高崎屋」

女性主将 48 期長島僚子さん(カワイカッタ～)、リーダー会の 48 期浅妻悠介君、火器ならまかせろ！コールマンを熱く語ってくれた 49 期内田健太郎君の３人が現役では参加。「今年の冬山合宿は福井県の荒島岳です」「人数が少ないため、各パーティには１年生が１人」「それって可哀想だし寂しいよね」「『白梅寮』ってコトバを聞くと、今でもドキッとする」なんていう話題で盛り上がりました。

当時のまま

山では、唄は歌われなくなってしまったそうですが、北溟・泉学寮生でもある浅妻君と内田君は「四高寮歌」や「南下軍の歌」はお手のもの。今も代々しっかり先輩から仕込まれているそうです。それを聞いて、なんだか少しうれしかったなぁ…。

9. 秋刀魚パーティと須磨アルプスハイク

9月イベント／
05・10・1, 2／8, 9
KUWV－OB近畿支部

昨年も好評を得た秋刀魚パーティを9月イベントとして10月に2週にわたり金沢からのOB来客も参加、実施されました。会場を明石雑草園として提供頂いた11期加藤夫妻のお世話やOB会員のお気遣もあり、グルメな食事、讃岐ウドン打講習、大型のスクリーンを使った山行報告、六甲山ハイクなど盛沢山の実施内容で大いに楽しみ、リフレッシュ出来ました。
参加者は支部イベントとしては過去最大の延べ24名となりました。

前週祭・乾杯・明石雑草園

本祭・秋刀魚で乾杯

1

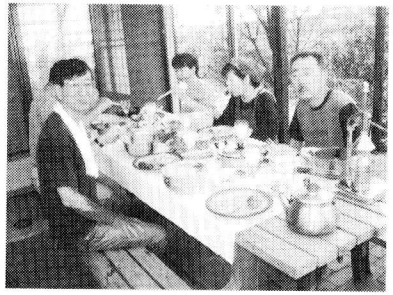
■前週祭参加者

10・1(土)パーティ:
5期金岩、8期篠島、11期加藤夫妻、畔山夫妻、15期奥名(金沢)、宇野、高村 9名
宿泊者: 篠島、加藤夫妻、奥名、宇野、高村 6名
10・2(日)六甲ハイク:
篠島、加藤夫妻、奥名、宇野、高村 6名

■本イベント参加者

10・8(土)パーティ:
6期小川、8期伊豫、篠島夫妻、10期藤井、島林、11期加藤夫妻、12期野村、15期舟田(金沢)、間所夫妻、宇野、金井、高村 15名
宿泊者: 伊豫、篠島夫妻、島林、藤井、加藤夫妻、舟田、間所夫妻、宇野、高村 12名
10・9(日)須磨アルプスハイク:
篠島夫妻、加藤夫妻、舟田、間所夫妻、宇野、高村 9名

2



十月二日・雑草園朝食

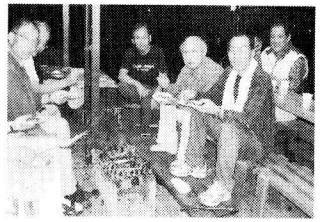
十月二日・六甲ハイク

六甲最高点

参加者・不参加者からも差し入れが多く、秋刀魚は陰が薄くなり、松茸・鯛・栗・鮎・神戸牛など高級食材が沢山、グルメパーティ化しています、ベルクハイムの小屋前の胡桃を沢山、持参してくれた方もありましたが、ワンゲル総肥満化の恐れありです

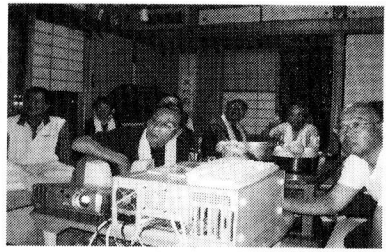
ウドン打ち
格闘する間所夫妻

長浜在住の23期石地さんから差入の鮎を焼く



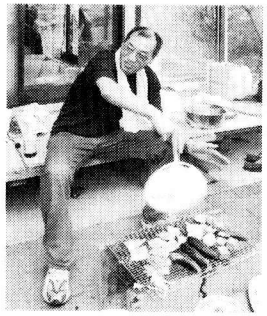
3

大量の差入



山紀行上映

奥名・舟田・加藤・篠島などが今年の自分の山行きを上映、舟田さんのカラコルム、ヒマラヤ遠征はボリュームと内容が圧倒的でした



焼きに奮闘する伊豫さん
ワンゲル仕込か敦子さん
仕込みかは不明、出来は上々

須磨アルプス・馬の背

4

秋の山小屋酒場

平成１７年１０月１日（土）

13期　吉田　穂積　　吉本　良治

15期　舟田　節子

byせっちゃん

◆春の山小屋酒場は中止になっています。昨秋毎週のように来襲した台風のために、県道倉谷～土清水線は７箇所で、路肩崩壊に、路面埋没。大型重機が入り、通行止めとなっていたためです。

◆倉谷の主・山下忠さんが昨冬、脳梗塞で倒れられました。雪の中、狩猟中の発作で、仲間の発見がもう少し遅かったら危なかったそうです。「リハビリやいうて、あんな所におっても」と本人の退院報告の電話で、これを知りました。幸い、しゃべる方も支障なく、通行止めの詳しい経緯も知らせていただきました。（小屋作業では何かとお世話になっておりますので、ＯＢ会の方からお見舞いを出しました。）

◆秋の酒場は直前取り消しもあり、３名の参加にとどまりました。「参加が少ない」以前に、「酒場がある」を知らせられもしない、（知らせる努力がなされていない）が、第一のネックなのでしょう。

ともあれ、課題は屋根のペンキ塗り。天候に大いに左右されてしまうところです。明日日曜は雨の予報、加えてこの人数。さて、どうする？の早々の協議により、今日土曜の日帰りで突貫作業と決まりました。さっそくシュラフ他、食材を抜き取り、デイパックバージョンに。

ゲートから奥は新しい路肩に、擁壁。さらには、落石の目立ち始めていたダムから奥も整備された跡がありました。したがって、第二の切れ込み付近まで轍があり、楽。そこから後も、多分山下さんの、「兼リハビリ作業」と思いますが、草刈りされた跡がありました。倉谷川の本流は、結局元の右岸側に戻ったようです。こうして半年毎に倉谷川を眺めてみると、川床があがり、蛇行して、また一気に本流が復活する過程がよく分かります。山里は廃れるのみですが…。

さて、小屋の方は、１０日前には現役の小屋作業が入っていたこともあって、外も中も綺麗になっていました。

ここへ来る前、参加が３名と聞いた旦那からは「いつまでこだわって、くだらんことをやっとるんや」と嫌味を言われましたが…今、山人は消え、あるいは高齢化し、各所で山道が消えていっています。百名山のような所はオーバーユースになる一方で、マイナーな山は既に経済効果もなく、いわば思い入れの次元でこだわりの数名により、やっと維持がなされています。高三郎などは、補助金が出ているだけマシ、恵まれている方です。それにした所で、小屋がなくなったら、金欠現役でも、登山道整備作業入りの二の足を踏むことでしょう。

実際私も、この先が読めません。ブームになった中高年登山も、高高年登山化しつつあります。思いがけぬ懐豊かな層の出現にデラックス化した北アの小屋に、いつまでお客が来るのか？年金削減、介護保険のシビア化で困窮していく中高年層。それらの負担をかぶせられ、かつ将来公金を当てにできない若年層も、もうお金のかかるレジャーをやってはいられません。

そんな頃に、手近な山遊びが復活してくるのか？

かつて、自然保護は「アカ」と言われました。それが経済が減速しかかると、大逆転。優等生的活動の解釈となり叙勲対象に。白峰・桑島の化石館も角間に移築されて、金大の里山活動の拠点となりました。こんなことが大学の研究テーマになるのか？ですが、時流に乗らないと、研究費が下りてこない。すなわち時流です。

このような時流に、山里であった倉谷の、そこにある山小屋は乗るのか？乗らないのか？何しろダム（必ず行政の手が入る）から、１時間強。ボートなら１０分。意外と地の利があり、歴史もあり、他の山域が持たないキャラクターなのです。さらに経済減速したら、思わぬ脚光を浴びる地になりはしないか？せっちゃんの夢（妄想？）です。

まあ、そんなムツカシイことを毎度考えているわけではありません。まして、投資もできません。ただ、「ヤル」と労力を割いて下さる方がいる限り、私は飯場のオバハンを務めるのがスジです。そして、「ヤル」を決めるまでが、多少難儀で、行ってしまえば、ダム湖の景色から、倉谷の景色から、最後の急登を上がった途端「ああ、無事だった」の、安堵感。そして物好きな仲間達と何ともリフレッシュできる時間が流れていきます。

今回は、身軽な穂積オヤジが屋根に登り、屋根用靴の準備のなかった吉本さんが、脚立に登り、錆落とし・下塗り・本塗りを行いました。減量したとはいえ、屋根に登れそうもない私は、お昼の用意と掃除、そして小屋前に落ちていたオニグルミ拾いに精を出しました。

釣瓶落としの秋の陽と戦い、それでも成せば成る…青光りする屋根を後にしたのは午後４時１０分。穂積さんが５０肩であること、吉本さんが腰痛体操に励んでいること…感知できぬ作業ぶりでした。そして私の採集したクルミは翌週、１１期加藤家での近畿ＯＢ会秋刀魚パーティーでの何よりのおつまみになったのでした。

－完－

野沢温泉スキー合宿０５報告記

栂　典雅（１９期）

●期　日：０５年2月２６日（土）～２７日（日）＜前後泊数名＞

●参加者（計１７名）

田村　昭夫(0)、柴田　勝之(8)・奥様、保田　敦(9)、青柳　健二(11)、上村　人史(11)
片田　寛(11)・道子嬢、小山　清(11)、芝田　真(11)、守内　成一(11)、森川　功(11)、
辰野　隆義(13)、奥名　正啓(15)、上馬　康生(15)、栂　典雅(19)・睦美(21)

はじめに

編集長の命により、何人かに原稿の依頼をしたのだが、体よく？断られ、結局、書く羽目になってしまった。その替わり、幹事長及び幹事長代理のメール掲載を了解していただいた。

雪の初日

金沢からの参加メンバーは、辰野さん、上馬さん、奥名さんに、ぼくとカミさんの５名。夜明け前、集合場所へ着いても雪は間断なく降り続いていた。こういう状況で高速道路を走るのは、不安が募るものだ。しかし、辰野さん運転のエスティマは快適そのもので、順調に宿の「リゾートハウスふるさと」に到着した。

部屋では、田村教祖はじめ３名ほどが、朝からの酒でできあがっていた。ぼくたちは、ゲレンデを知り尽くした辰野さんをリーダーに、集合場所のレストハウスへ向かい、昼食のあと滑り始めた。しかし、ときおり激しく降る雪の中、顔の周りは凍り付き、視界も効かず、うわさのスカイラインはおろか初級コースを滑るのも難儀した。ところが、自称「中年暴走族」の１１期諸氏は、かっ飛ばしていたそうだ。

至福の夜

野沢温泉スキー場の魅力のひとつは、温泉街に点在する１３の外湯で、ぼくも一番近くの「中尾の湯」に行った。素朴で熱い純生の温泉だったが、湯に浸かるのも順番待ちといった「芋の子洗い」状態であった。

「ふるさと」の食堂では、野沢菜たっぷりの食事の後、片田さんの娘さんのピアノリサイタルが催され、とてもリッチな気分に浸る。それから、ピアノ伴奏で「隅田川」を歌い、「ふるさと」の亭主・従業員も加わって、「故郷」を合唱した。う～ん、パーフェクト！

部屋に戻ってからは、全国各地の銘酒、銘菓・名物が並ぶ。恒例となっている「お点前」は、昨年の舟田さん（１５期）のような和服姿とはいかないが、森川さんと奥名さんが代わりを務められ、スキー合宿伝統の一服を味わうことができた。

それにしても、ぼくは、酒はもちろん、甘いものもいけるし、スキーもするが、酒を飲みながら饅頭を喰い、ゲレンデを滑りまくる諸先輩のバイタリティには、完全に脱帽であった。

二日目は雪のち晴れ、のち・・・

翌日は、温泉と酒でくつろぐという奥名さんに見送られ、４人でゲレンデに向かう。次第に晴れてきて、展望が効くスカイラインをはじめ、多彩なゲレンデをテレマークターンで舞うことができた。

さて、下山のコースを選ぶ段になって、辰野リーダーは（多分、ぼくらの実力をみて）長距離林間コースを薦められたが、ぼくは、やっと調子も出てきたので、パラダイスからユートピアへ下るコース（中級）を滑りたいと言った。

ところが、そのコースへの分岐に来て初めて、大会のため滑降禁止になっていることがわかった。しかし、いまさら登り返すこともできず、結局、上級のシュナイダーコースを滑らざるを得なくなった。５０cmを超える新雪にスキーをとられて転びそうになったとき、すでにビンディングがはずれていたのだろう。次に滑ろうとした途端、片方のスキーを流してしまった。ストッパーは付いていたのだが、このビンディングは、靴と板が離れただけでは効かない仕組みで、流れ止めを付けていなかったのが失敗だった。みんなに探してもらったが、林の中の深雪に埋もれたのか、結局、板は見つからず、惨めにも片足で宿へ戻り、帰途につくことになった。

最後は、リーダーの言うとおり、おとなしく林道コースを滑ればよかったという禍根を残してしまったが、楽しいスキー合宿であった。

みなさん、ありがとうございました。

＜青柳さんのメール＞

楽しいスキーが終わりました。

節チャンの心配りは、幹事長と辰野氏が引き受けて、スキー疲れを取るべく全参加者に緑深いビタミンＣを提供してくれました。（中略）

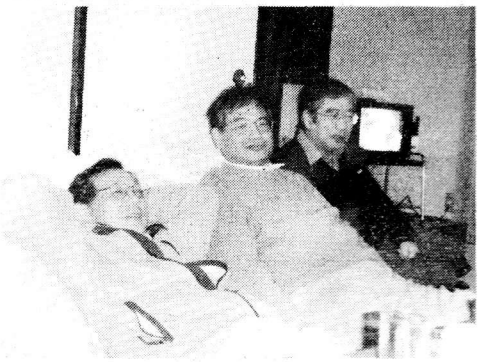
２６日の夜の宴は、最後を片田道子嬢がドビッシーのピアノソナタで盛り上げてくれました。

最後は宿のテーマソングの「ふるさと」を全員がピアノ付きで合唱しました。宿の西方さんたちも皆で拝聴され楽しんで頂けたようです。

さて、スキーの方は、３日間異なる天気と雪質の中、タップリ楽しみました。２５日は快晴、最高のカービングバーンで、保田大先生を先頭に小山氏、スキー一式を新調した守内氏と共に、快適滑降を存分に楽しみました。

２６日は、一転して大雪。片田氏の測定では、一時間当たり５センチの降雪の中を、負けずに滑りました。昨日一日で満足した小山・守内両氏はキャンセル。当日の朝付いた森川・上村の同期と柴田夫妻が合流し新雪とコブコブ斜面の中で奮闘です。カービングターンが描けない悔

しさと自由にならないスキーがモドカシク、雪のなかで転ぶ楽しさをも再確認させてもくれました。その中、金沢のドカ雪育ちの保田さんの強さが目立ちましたが、最後のスカイラインの滑降で、大転倒を目撃し、人間であることを確認できてホッとしたものです。



２７日は、午前中は雪、午後から晴れのスキー日和。前日の疲れが残る保田さんがキャンセル。柴田夫妻と森川・上村氏を加えた強者５名で、ヤマザトゲレンデ中心に新雪のカービングターンを満喫。昼食後は、今シーズンから滑降可能となったブナ林の中でパウダーの感触をあじわって大満足。最後はスカイラインの２連発の快適滑降で締めたのでした。前日の雪の中での苦労が実り、強いスキーに目覚めました。また、スカイラインの急斜面の中で、カービングショートターン習得を実感できたのも大収穫でした。スキーでは、なぜか金沢組とすれ違い、今回初参加の栂夫妻の滑りを拝見できなかったのが残念でした。彼らも、この野沢の雪質と快適斜面には満足された筈ですから、また来年に同走したいものです。

この３日間で、大きく成長した我が勇士を、加藤名監督の手で記録に残せなかったのが、心残りです。３月の連休の志賀高原スキーに是非と参加されることを、森川幹事長ともども強く望むものです。（中略）
まずは、お礼とご報告まで。幹事長代理でした。

＜森川さんのメール＞
みなさん無事帰られたことと思います。
幹事長代理の続き　２７日午後（追記）
幹事長代理がケーキセットをやめてまで、スキーに熱中する程のコンデション。
最後は柴田さんにバス停まで送ってもらってバスに間に合い無事帰れたことと思います。

２７日の夜は一人静かに１０時間程の睡眠をとって、幹事長の疲れを取り２８日朝は掃除直後の湯船に半分しか貯まっていない新鮮な湯に浸かり朝一番でやまびこへ。
明るい太陽の下、日焼けを気にしながら、無風の中、柴田さんが言っていた『整備されたゲレンデで１０番以内に滑るゲレンデ状況』で自分自身の風とスピードを楽しみました。スカイラインも同様で保田さんの・・・・が信じれない程簡単で約５分で滑り降りました。
リフトもゴンドラもノンストップ。それでも疲れはなし。スキーは技術や道具や体力より、コンデションを痛感しました。
昼食は先日食べそびれたケーキセットのみ。
それでもあっという間に午前券を終了。最後は、戸狩温泉駅でラッセル車を見て飯山線の普通でノンビリと帰りました。
みなさん、また０６年中尾の湯で会いましょう。

★野沢温泉スキー合宿06予告 ●●● *「凍」「闘」でなく、「楽」でいこう!!*

実施日：２００６年　２月２５日（土）～２６日（日）
（前後いづれか１日延長して、２泊３日がお勧めです！！）
場　所：いつもの　野沢温泉スキー場&共同温泉浴場１３湯
宿　泊：リゾートハウス　ふるさと
長野県下高井郡野沢温泉村６５５６
電話　０２６９－８５－２２４１
（宿泊代は、一泊２食付　約８０００円）
幹事長：11 期　森川　功　：　同代理　11 期　青柳健二

２００６スキーのモットーは、ズバリ『楽』
信州野沢の１００%かけ流し温泉を、タップリ楽しもう！！
宿の名物料理と、ＯＢ会名物夜のワイガヤ会を楽しもう！！
抜群の雪質、多彩なゲレンデで、スキーを思う存分楽しもう！！
さらにオリンピックイヤーの、２００６年特別メニューは、
２００５年にヒマラヤ連峰の魅力をタップリ楽しんだ人の
『ヒマラヤトレッキング３連チャン報告会』

申し込み：２００６年２月５日(日) までにＥメール or 電話にて、下記の幹事長／同代理へ。
kenaoyagi@aol.com　（青柳）　048-481-0275
isaom@bl.mmtr.or.jp　（森川）　0594-22-0353

＊和室３部屋を確保していますが、家族参加の場合は別室を確保しますのでその旨申し込み下さい。
＊なお、野沢温泉スキー場・リゾートハウスふるさと・積雪・場所などの情報は、下記のＨＰへ。
http://nozawaski.com
http://www.nozawa.com/furusato/oyado.htm

★11期・長岡正利氏 講演!!　●●● *冬期の机上講習(中日登山教室)*

演題：「山の高さとは」～ 地形図と、そこに表示される「山の標高」の考え方 ～
講師：長岡正利氏
期日：平成１８年２月１８日（土）午前１０時～１２時
場所：金沢市香林坊２丁目中日ビル８階（参加費 1500 円）

講師プロフィール ➔ 金沢大学大学院修了(地学)、ワンゲルＯＢ(11 期)。学生時代は白山の地質調査に取り組み、白山火山の地質図完成とその形成史を解明。その後は、仕事とあわせ地図を趣味にさまざまな著作活動。現在、国土環境㈱勤務。もと国土地理院地図部長。

現役生!! 2005年度 活動報告

ワンゲル現役３回生　48期　伊藤謙一

４月；歩荷トレーニング（卯辰山）
５月；新入生トレーニング（医王山）、総会
６月；結団式
　　第一回トレーニング山行（獅子吼、口三方）
７月；第二回トレーニング山行（白山）
８月；夏合宿（南アルプス、中央アルプス、北海道）
９月；小屋作業（高三郎）
11月；雪上訓練（白山）
12月；冬合宿（荒島）
以下は予定
１月；追いコン
2(3)月；春合宿
4(3)月；1,2年山行

今年の新入生は１年生５人、２年生１人でした。
１回生６名、２回生７名、３回生５名、計18名で活動し、部の年間行事（上記）は３回生主体、P.W.は主に２回生主体で行いました。夏合宿のパーティ分けは以下のとおりです↓
※（回生）
北アルプスパーティ；浅妻(3)、本沢(3)、田淵(2)、鍛冶(2) 角江(2)、増田(2)、小島(１)
中央アルプスパーティ；伊藤(3)、長島(3)、長谷川(2)、志賀(2)、大和(1)、河原(1)、山本(1)
北海道パーティ；村田(3)、内田(2)、塩原(2)、横山(1)、中野(1)

では続いて、３回生の伊藤君に今年の夏合宿を通じて山への思いを語ってもらいます・・・

２００５年度夏合宿中央アルプス
空木岳～南駒ケ岳～宝剣岳～木曽駒ヶ岳を縦走して

今年の夏合宿で私はリーダーをやることになりました。リーダーをやると決まってからは、どこの山にしようか非常に悩みました。最終的に南アルプスか中央アルプスのどちらかに行こうと思ったのですが、南アルプスは１年の夏合宿で縦走した経験があったので、せっかくなら一度も行ったことのない中央アルプスに行ってみようということに決めました。中央アルプスは、北、南アルプスに比べると、規模が小さいので、金沢大学のワンゲルの夏合宿ではあまり人気がない山？だったかもしれません。確かに私も中央アルプスに行くと決まって計画を立てるまでは、中央アルプスの中で知っていた山は空木岳くらいし

かありませんでした‥。しかし！計画書を作成していく段階で、宝剣岳や木曽駒ヶ岳といった３０００m に近い山々があること知って、だんだんと中央アルプスへの期待が高まっていきました。そして行程は菅ノ平バスセンター近くの林道終点から登って、空木岳～南駒ケ岳～檜尾岳～宝剣岳～木曽駒ヶ岳～しらび平(ロープウェイ)に下りてくるコースを縦走することに決めました。この中央アルプスの縦走コースですが、あいにく夏合宿では全体的に好天に恵まれず、残念ながら景色を楽しむことがあまりできませんでした。空木岳、南駒ケ岳での両方のピークでガスっていました‥。しかし、実際晴れていたらどんな雄大な景色が見ることができただろう？という次に登る時の楽しみができました。中央アルプスは空木岳～木曽駒ヶ岳手前の中岳までは幕営が禁止されており、そのため、木曽駒ケ岳頂上山荘以外では小屋泊まりをすることになりましたが、どの小屋もきれいで避難小屋とは思えないほど居心地がよく、そのおかげで、夏合宿を快適に進めることができました。空木岳、南駒ケ岳を制覇した後は、檜尾岳までの行程が非常に辛かったのを覚えています。これでもかこれでもかというくらいニセピークがあり、何回もだまされてしましました。まだまだ地図読みができていない証拠ですね‥。檜尾岳を越えてからは極楽平～宝剣岳という行程ですが、この夏合宿の中で一番印象に残ったのがこの行程でもあります。極楽平は、一面が岩や草で覆われていて、全く何もありません。その名の通り『極楽』といった感じで、本当にあの世にいるような感覚がしました。またその日はガスっていて、登山道が向こう側に消えるように延びていたため、なおさらそんな雰囲気がでていました。極楽平を越えると前方にそびえたっていたのが宝剣岳です。宝剣岳ピークまでは、両手、両足をフル稼働しなければ登れないような岩場が続きました。垂直に近い岩場が何回も続き、上下左右に移動しなければいけませんでした。ここはパート・ワンデリング(またはサブザック)なら、アスレチック感覚で楽しめたと思いますが、如何せん、私達は縦走装備(メインザック)で登っていたため、あまり楽しむ余裕はありませんでした‥。宝剣岳に次に来る時はパート・ワンデリングで来たいですね！宝剣岳を制覇すると最後は木曽駒ケ岳です。ここはご来光を見るために朝早く登ったのですが、ガスっていて全くご来光と周りの景色が見ることができませんでした。残念‥。このようにして、私達中央アルプスの行程は終了したのですが、やはり一番残念だったのは、天気に恵まれず、１回生に山の雄大な景色を見せてやることができなかったことです。しかし、登山は自然を相手にするスポーツであり、そのため天候によって、自分達の思い通りにいかないことはたくさんあります。しかし、だからこそ、晴れてピークまで苦労してたどり着いた時に見る景色は格別のものがあると思います。この快感がまた山に登りたいという原動力になるのではないのでしょうか？私は来年４回生になるため、学校のほうも忙しくなり、部の活動に関わることは少なくなってくると思いますが、時間があったらまた山に登っていきたいと思っています。

2005 年 11 月好日

金大ワンゲル部３回生　伊藤謙一

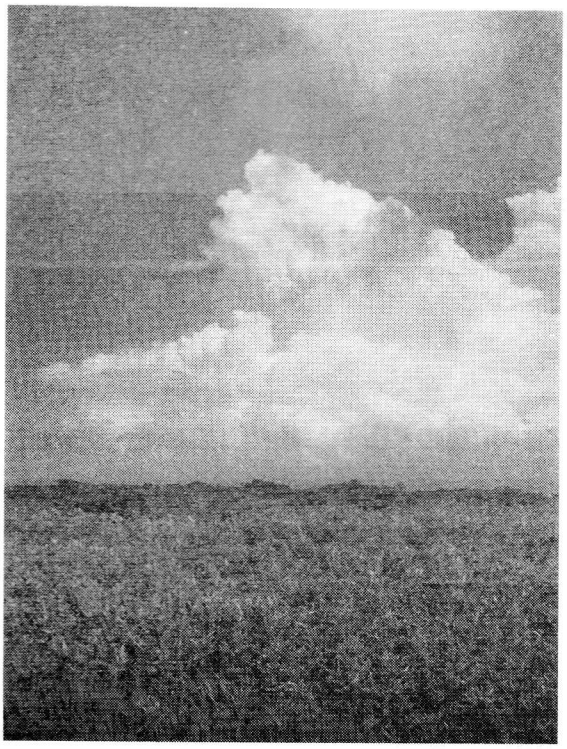
やまざと写真館－3

20期　深田　進

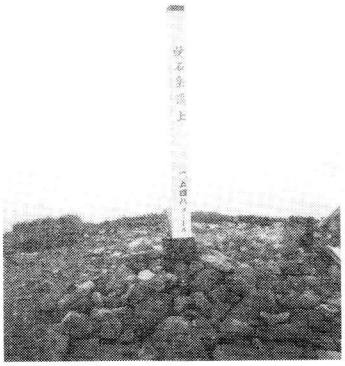
東北 焼石岳の旅

焼石岳を目指す気分のいい木道

東北特有のひなびた湯治場・夏油温泉



頂上だぁ！



最後の青空
おお！入道雲

リュウキンカ

次・やまざと'07 原稿大募集

来号『やまざと』の特集は、「**食**」を予定しています。

革命を起こした○○さんの△△料理
哀しきペミカン秘話
食には一過言あった××先輩 etc.etc.

あなたの心温まる原稿をお待ちしています。アクセスは事務局まで、いつでもＯＫ！！

ＯＢ会会計報告

（平成16年12月1日～平成17年11月30日）

【収入の部】

ＯＢ会費納入	429,000
預金利息	8
計	429,008

【支出の部】

ＯＢ会報（やまざと）No.19印刷費	198,000
郵送費	106,260
小屋酒場備品代	13,631
小屋酒場食費	2,757
小屋酒場諸雑費	570
山下忠氏お見舞い	3,465
事務備品費	7,530
その他	718
計	332,931

【差引剰余金】

前回（16.11.30）繰越金	1,826,746
収入の部	429,008
支出の部	332,931
差引合計	1,922,823

ＯＢひとこと通信

・会報１９号が届きました。ありがとうございます。ワンゲルOB会の木がしっかり根っ子を張ったような気がして嬉しいです。ただでさえ忙しい年末にたいへんでしたでしょうが、みなさん、心暖まる年の瀬になることと存じます。（15期・舟田）

・昨日「やまざと」受け取りました。金沢・倉谷・ベルクハイムの香りが漂い、しばしの間、安らぎとエネルギーが感じ取れました。ご苦労様でした。こういうものを受け取ると本当にうれしいものです。それ以上に作成にかかわった人たちにとってはうれしさを感じていることでしょう。ゆるりと次のステップへ歩んでください。（15期・奥名）

・表紙の「やまざと」の文字の大きさからして迫力ある内容で、結構な出来栄えだと思います。私メの原稿と写真がスキー案内も含め、少なからずページを専用したこと、気恥ずかしい限りです。掲載文字数が、初めて前編集長舟田女史を越えたことは、誇りとしても良いかなとも思いますが。次号では、大野さんも、編集だけでなく、前編集長に負けず、達筆を披露されますことを期待します。今日は、東京でも初雪が降りました。最後まで、自然の破壊力の凄まじさを実感させられる年となるようです。来るお正月は、安らかに迎えられますように・・・。（11期・青柳）

・「やまざと」19号拝受しました。どうもありがとうございました。新聞社に30年勤めていましたが、このごろは原稿を書くのも億劫で、今回もなんのお役にも立てず心苦しい限りですが、お陰さまで楽しく拝見することができました。（中略）失業中に四国八十八所の遍路に出たのですが（もちろん歩きです）、25番札所で中断してしまいました。また、数年前から手がけている「北国街道参勤交代の旅」も、ようやく武蔵の国本庄宿（埼玉県本庄市）までたどり着いたものの、お江戸日本橋のゴールまであと3日のところでこちらも中断。残念ながら、どちらも紀行文を「やまざと」に投稿することはできませんでした。いずれの日にかゴールできましたら、そのときには投稿させていただきます。重ねて、ありがとうございました。（15期・松林）

・表紙に使ってもらってありがとうございました。チョッと恥ずかしいけれど嬉しいです。野鳥の会諏訪支部の支部報が今度の1・2月号で通算100号になります。3号から私が表紙を書いています。年6回発行なので、もう16年ほど続いています。ベルクハイムや高三郎にはもう25年以上もご無沙汰しています。5年ほど前に小立野から眺めたのが最後です。「やまざと」の森さんのページを読んでいて、駒帰から犀川ダムへの長い林道、高三郎の取りつきの急坂、ホトトギスやヨタカやトラツグミが鳴く夜のベルクハイムなどの風景が思い出されました。それから、富山の両親にも送ってもらいました。ほんとうにありがとう。またイラストなどの用事があればいつでもメールしてください。いつか会える日を楽しみにしています。（21期・竹中）

・「やまざと」も読ませてもらいました。色々動きがあるんですね。ワンゲルも49期なんかになっているですね。びっくりしました。もうすぐ半世紀なんだと思うとすごいです。年末はパタゴニアに行って、氷河やペンギン、アザラシを眺めてきました。遠くて、ここにいる間しか行けない所でした。（21期・山口克己〈ブラジルのサンパウロに赴任中〉）

・やまざとVOL.19、楽しかったです。元気をもらいました。なにか、僕たちは帰る場所があるなって感じ。まさに「やまざと」ですね。とっても元気が出る一冊でした。ありがとうございます。（20期・松下和隆）

・やまざとありがとう。楽しく読ませて頂きました。（11期・加藤忠好）

・お世話役、ご苦労様です。やまざとも年末に受け取りました。今年はOB会に加えて自分も白山とその周辺の山に挑戦したいと考えています。（8期・篠島益夫）

・遅くなりました。申し訳なく思っています。お世話になりますがよろしくお願いします。還暦登山というわけでもないのですが、先日（4/24～25）笈へ穴田君と登ってきました。2000年の白山以来、ボチボチと歩いています。笈では上馬氏にアドバイスを頂きました。ありがとうございました。（8期・伊豫）

・新役員の皆さんが楽しく運営されることを期待しています。「やまざと」18号の内容も良かったです。欲を言えば、写真に解説があるともっと良かったです。（17期・渡辺）

・39期の西田です。大変遅くなりましたが、会費を送金させていただきます。いつもお世話になっております。12月4日に金沢で結婚式を挙げることになりました。長年過ごした思い出の地での式の準備にあわただしくしている今日この頃です。（39期・西田）

・いつもありがとうございます。36期蒲原良太郎の親です。毎年、剱岳に追悼山行に行っています。これからもよろしくおねがいします。（36期・蒲原）

・「やまざと」楽しく読ませてもらいました。今年は、福井の経ケ岳、荒島岳、奈良の釈迦ケ岳、奥又白池経由で穂高・槍往復、二軒小屋から千枚、悪沢、赤石などへ行きました（21期・竹本）

・「やまざと」楽しく読ませていただきました。（11期・片田）

・OB会のお世話、ご苦労様です。ワンダーフォーゲルの心を持続されて活動されている皆様、すばらしいと思います。（19期・石田）

・事務局のお仕事ご苦労様です。大変でしょうがよろしくお願いします。（21期・丹野）

・いつもありがとうございます。9期の平村（旧姓・橘）です。山小屋の特集がされていました。入部した'64年に山小屋の建設に取り組んだことが思い出されます。そして'66年（？）に山小屋委員として規約を整備したり、周辺のルートを作ったり…、楽しい思い出です。（9期・平村）

・やまざと19号ありがとうございました。正月の少しのんびりとした時間の中に、なつかしい時間と空間を楽しむことができました。（15期・坂尻）

・20期藤原です。現在は単身で東京に赴任しております。ご無沙汰を続けておりまして申し訳ありません。影ながら応援させていただきます。（20期・藤原栄）

・昨年秋に帰国しました。よろしくお願いします。（16期・清水重）

・長い間のごぶさたでした。皆様のご活躍の様子がよくわかり、なつかしく拝見いたしました。益々のご発展を遠くからお祈りしております。（9期・斎藤）

・15期生の家族です。わざわざお送り下さりありがとうございます。郵便番号、電話番号の訂正をお願いします。夫が亡くなり15年間も過ぎるのに、会員の皆様同様に仲間入りさせていただいていつも恐縮に思います。（15期・比田井　澄恵）

・21期の村松です。OB会の活動お疲れ様です。（21期・村松）

・近畿OB会いいですね。誰か関東OB会作ってほしいなぁ～。そしたら私参加したいなぁ～。（14期・仁藤）

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会・会報誌「やまざと」VOL.20 ――― 山の子たちのうた号

発行日■平成17年12月
発行者■栂　典雅（19期）
編集責任者■大野直子（21期）
印刷■プリントショップ多田

事務局■金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会
〒920-0226　石川県金沢市粟崎町2-111
大野　直子
TEL&FAX 076-237-8706　E-mail ohno@yu.incl.ne.jp

栂　典雅　会長　E-mail　togatotoro@yahoo.co.jp
名倉 均 名簿担当（23期）　E-mail　nag2138@po3.nsknet.or.jp

振込口座■郵便局／00780-3-14120／金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会
振込口座■北國銀行本店／普 223703／金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会

ＫＵＷＶ ＯＢ会ホームページ（管理人/奥名正啓・15期）■http://www.kuwv.net

ホーヨ　ホヨヨ
ホーヨ　ホヨヨ
春がステキだーよ♪